湘南サッカー創部90周年特集号

創部 90 周年　OB 会報特集号

～湘南サッカー　100 年へ向けて～

湘南サッカー 90年とOB会

湘南サッカー部 OB 会会長
昭 36 年卒　井上　孝

１９２１（大正10）年に、湘南中学が県下６番目の中学校として創設され、初代校長の赤木愛太郎先生は全校の生徒ができるスポーツとして蹴球を奨励し、校技とされた、と伝わっています。学校創立とともに歩んだ、我が蹴球部（サッカー部）も90周年を迎えることになります。まずは、ＯＢ諸兄とともに、このことを喜びたいと思います。

湘南サッカーおよびＯＢ会の歴史については、インターネット上の「湘南サッカー」を開けていただくと、１９８１年発行の『湘南サッカー　半世紀を経て』が収載されていますので、それを読んでいただければよいと思います。また、平成13年発行の創部80周年記念号としてのＯＢ会報には、柳川会長によるその後のＯＢ会の活動等に関する報告が記載されておりますので、これまたご参照いただければ幸いです。

さて、今日、ＯＢ会々員は９００名に喃喃としております。もちろん、この90年の間に物故されたＯＢの方々を加えれば、湘南のグラウンドでボールを蹴った仲間は、さらに増えるわけです。現在のＯＢ会名簿における最年長者は中村正義（３回）さん、99歳のご高齢で、今回も文章をお寄せくださいました。なんとも、すばらしいことで、創部90年とともにまことにご同慶の至りです。湘南には多くの運動部がありますし、そのＯＢ会もそれぞれ活動しておりますが、歴史が長いということとも相俟って、多分サッカー部ＯＢ会がもっとも多くの会員数を誇っているのではないでしょうか。

会員数のみでなく、組織・活動面で、湘南のＯＢ会の代表的存在ではないかといささか自負いたしております。これは、しかし一朝一夕に成ったことではありません。これには、二つの契機があったと思います。一つには、上述の『湘南サッカー　半世紀を経て』においても触れられておりますが、ＯＢたちは、ときにチームを結成し、ときに別々のチームで活躍していたわけですが、１９５０年代より、1月15日に集い、「湘南蹴球祭」を行なうようになったことです。小生も１９５９～61年の蹴球祭に現役で参加して、天野会長（一回）の温顔や諸先輩の若きお姿を記憶しておりますが、以来、この催しは連綿として続いており、これが湘南サッカーと、確固たるＯＢ会の礎であることは疑いを得ません。その源は、なんと言っても湘南サッカーにおける最大の貢献者であります岩渕二郎先生のご発案であったと思います。そして、第

二に、岩渕先生のご逝去を機に、ＯＢ会が一段と整備されたことです。１９８１年のことですが、故・安保隆文先輩（15回）の指揮のもと、現ＯＢ会副会長の相羽克治君（41回）等が中心になって、現在の形の基礎を築いたわけで、その点での同君等（当時の！）若手ＯＢの貢献は特筆に値し、大いに感謝いたしております。

さて、湘南サッカーＯＢ会の大きな特徴の一つは、現役支援の精神と力であろうと思います。インターネットで「湘南サッカー」のＨＰを見ますと、現役の活動とともに、１９７８年創立の湘南ペガサス・サッカークラブの５チームのサイトがあります。開かれたクラブとしてのペガサスは、１２０余名のクラブ員のすべてが湘南ＯＢではありませんが、しかしその発祥はまさに１００％湘南ＯＢであったし、現にその会則にも「湘南高校サッカー部への支援」を謳っております。この現役支援については、なによりもその精神の拠って来たるところが重要であろうと思います。同じグラウンドで汗を流した者達が、後に続いてそれを共有する者たちをできるだけ応援しようとする気持ちです。創部以来、脈々として培ってきたその精神こそ、伝統的な、パスワーク・チームワークを誇る湘南のサッカーの精華なのだろうと思います。今回、90周年を祝うにあたって、日本サッカー界を代表する方々からメッセージを頂くことができました。これには旧制中学の先輩諸氏のお力が与って大であります。こうした人的絆はまた湘南サッカー部の大いなる遺産でもあります。湘南でサッカーをやってきたことは人生の財産、と私は思っております。伝統のありがたさです。

ところで、ＯＢ会の財政は毎年の総会および会報において周知のごとく、会報の発行・発送等のほかは、用具、合宿、スペイン遠征、等の援助で現役への支援に向けられております。指導者・生徒からは大いに感謝されておりますが、できる限りこれを続けたいと考えております。神奈川県代表になるには、どの時代でも、それなりに難しかったことは事実でしょうが、いまや２００校に近い数で、９～10回勝たなければ代表になれません。湘南サッカーを再び全国に知らしめるためにも大いに支援したいと思っております。しかし、ＯＢ会費納入者は残念ながら全会員の20％に至りません。しかも、その半数以上のＯＢが毎年会費の倍額を拠出してくださっております。来るべき１００周年に向けて、大きなイヴェントを夢見ております。財政基盤を得るために、多くのＯＢ諸兄に会費納入を改めてお願いする次第です。

最後に、毎年の会報の編集・発行の上に、今回の特別号、これらは挙げて関佳史君（48回）を中心としたスタッフに全面的に負っています。記してこれらスタッフに感謝申し上げます。同時に、ＯＢ会全体の運営に関しては、小生を除く本部役員の諸兄の力によるところ大であり、そうした貢献に併せて感謝申し上げます。

湘南
湘南サッカー部

特別寄稿

『ライトブルーのYシャツのユニフォームが印象的だった』

（財）日本サッカー協会最高顧問
岡野俊一郎

湘南高校サッカー部創立90周年を心よりお祝い申し上げますと共に、OB会報記念号に文を載せて頂けることを有難く、感謝しております。

昭和21年の夏でした。正確な日付は覚えていませんが、東大の御殿下グランドの強烈な陽光、湘南中学蹴球部の選手達の追力あるプレー、そして白い襟のライトブルーのYシャツのユニフォームは本当に印象的でした。更に松岡、原田、桑田、早川、下、香川、宮沢ら諸選手のお名前も、勿論0対4と言う試合結果も覚えています。練習試合ではありましたが、私にとって都立五中蹴球部のレギュラーとしての初めての試合だったからです。湘南は全員そろいのユニフォームとストッキングでしたが、我々はそろいのユニフォームを持っておらず、試合前の挨拶で並んだ時に既に気持ちの上で負けていました。

私は3年生で左のサイドハーフでした。当時のシステムは2フルバック・システム。守備はゾーンで、サイドハーフは相手のインナーとウイングの間を振られながら時間を稼ぎ、相手のインナーをタッチラインに追い込んでフルバックと連携してボールを奪うのが仕事でした。右のウイングだった5年生の桑田さんから見れば3年生の私は下手だったし小さかった。試合中に桑田さんが「おーい、こっちの相手はチビだから抜けるぞ。ボールを寄越せ！」と大声で怒鳴っていたのは忘れられません（また書いてしまいました。桑田さん、御免なさい）。Yシャツのユニフォームでしたから、全力疾走すると空気がシャツから抜けず、ユニフォームの背が膨らみ、その姿で風のように走る桑田、宮沢の両ウイングの格好の良さは、今でも忘れられません。

終戦直後のこの時代、東京の中学校で蹴球（サッカーとはだれも言わなかった）部があったのは東京高等師範付属中、都立五中、八中、九中、大泉中、石神井中、青山師範など。そして関東の県立では神奈川の湘南中、小田原中、埼玉の浦和中、児玉中、栃木の真岡中、宇都宮中、山梨の韮崎中、甲府一中などが強豪チームでした。今振り返ってみると、これらの学校は皆進学校だったのは興味深い事実です。

湘南中との試合は一回のみでしたが、昭和25年に東大に進学し、ア式蹴球部（今でもこれが正式名称です）に入るとキャプテンは湘南出の大埜正雄さんで、八星孚さん、海老原朗さんが居られましたし、後から山本修君、嶋田武夫君が入部し東大LB（全東大）で一緒にボールをける事になりました。

一方、当時関東大学リーグ一部にいた我々は慶応ソッカー部や早稲田ア式蹴球部と毎シーズン対戦し、これらのチームには湘南出身の選手が多く、自然と友達付き合いさせてもらいました。夏に昭和28年の国際大学スポーツ大会（現ユニバシアード）に参加するために、初めて編成された日本大学選抜チームの一員に選ばれた私は山口雄司、小林忠生、小田島三之助の皆さんと共に、生れて初めてヨーロッパを40日旅する機会に恵まれ、その交友は今も続いています。

サッカーがマイナー・スポーツだったこの頃を考えると、現在の隆盛は全く夢のようで嬉しい限りですが、社会現象としては、少子化の進展に伴ないスポーツが私学の生徒集めの手段になり、かつてのサッカー名門校は弱小校となり、名門大学もまた関東一部に残るのに必死になっているのが現状で、これらのチームに湘南高や小石川高の後輩の姿を見るのは稀になってしまったのは寂しい事です。

私の考えでは、サッカーは判断力によって技術・体力が使われるスポーツで、従ってインテリジェンスが求められるスポーツです。ブラジルやアルゼンチンのように、またナイジェリアやカメルーンのように、貧しい現実から抜け出るために、ペレを、メッシを夢見て、一日中ストリート・サッカーに夢中になっている子供・若者の環境と、日本のそれとは全く違います。

この意味から、文武両道の名門高校である湘南高校のサッカー部が、OBの皆様のご努力により90周年を機にまずサッカー名門校復活の狼煙を上げてくださる事を心から願うと同時に、期待してお祝いの言葉とさせていただきます。

［日本サッカー協会最高顧問、IOC委員。元日本サッカー協会会長、元日本代表監督］

特別寄稿

お祝い

（財）日本サッカー協会会長
犬飼　基昭

旧制湘南中学校の創設以来、湘南高校がサッカーを校技として取り入れてから90年を迎えられるとのこと、その歴史と伝統にあらためて敬意の念を抱く次第です。

湘南高校の思い出と言えば、何といっても私の母校である浦和高校と湘南高校との定期戦。当時、浦和高校と湘南高校は全ての運動部においてホーム＆アウェイの定期戦を行い、その勝ち点を総合して順位を競い合っていました。年ごとにどちらかのホームに両校の運動部が一堂に会すわけですからそれはそれは壮観なものでした。

当時、浦和高校サッカー部は『埼玉を制する者は日本を制する』と言われるほどの強豪校で、先取点を取るためにまずはサッカーが各部に先駆けて試合を行っていました。湘南高校サッカー部はひたむきでクレバー、かつクリエイティブなサッカーをする学校で、そのサッカースタイルが非常に強く印象に残っています。しかし、我々は「サッカーではどこにも負けない」という自負があったものですから、いつも相手を甘く見ては試合に臨み、苦戦を強いられていました。そんなことも青春時代の懐かしい思い出です。

現在、湘南高校は学校方針に「文武両道」の復活を謳っているそうですが、当時の定期戦が示す通り、昔は盛んに「文武両道」が叫ばれ、好きなスポーツや芸術などに熱中できる大らかな風土がありました。偏差値教育の時代に入ると、スポーツよりも塾通いをする子どもが増え、その中で、スポーツに打ち込む者を「スポーツ馬鹿」などと揶揄する風潮も表れてきました。一方、オートメーション化やＩＴ化が進んだ現代社会は、子ども達の体力低下や運動不足に拍車をかけることにもなりました。

スポーツも経済もボーダレスになった今、「文」だけ、あるいは「武」だけに秀でるだけでは通用しません。持てる能力を発揮するにはその根底に、豊な人間性、社会性があることが不可欠です。そしてそれは幼少の時から多感な青春時代までの教育で培えるものであると考えています。その点、湘南高校は学問、スポーツともに名門校で、今回90周年を迎えたＯＢ会報誌を見ても明らかなように、第一線で活躍しているサッカー部ＯＢが多くいらっしゃいます。そして、その多くの皆さんが母校を愛し、スポーツを愛していらっしゃることは特筆すべきことだと思います。

日本サッカーはＪリーグの誕生以来、長足の進歩を遂げていますが、そこに至るまでの長い間、全国でサッカーに取り組んでこられた先人の努力があったからにほかなりません。もちろん、湘南高校サッカー部、そのＯＢの方々のご尽力も例外ではなく、90年という歴史にその功績が刻まれているものと思っています。

これからも同校サッカー部が有能な人材を輩出しながら発展していくことを願うとともに、同サッカー部ＯＢ会報誌が母校とＯＢをつなぐサッカーの懸け橋として、今後も末永く続いていくことを祈っております。

［（財）日本サッカー協会会長。浦和高校、慶應大学、三菱重工でプレーヤーとして活躍。元浦和レッズ社長。昭和35年、浦和高校時代に定期戦、関東大会で湘南高校と対戦した。］

特別寄稿

天野さんを偲ぶ

Chris McDonald O.B.E.

（クリス・マクドナルド）

天野武一氏とは長年に渡り親交がありましたので1997年にご他界されたときは大きな喪失感を抱きました。天野氏と初めてお会いしたのは、確か1950年代の終わりか60年代の初めだったと思います。当時、私が英語を教えていた老紳士、大住達雄氏（三菱倉庫社長）の自宅で毎年催されていた新年会の場でした。大住氏は、財界、法曹界ではよく知られた人物で、来客の中には役者の花柳章太郎さんや長唄の芳村伊十郎さん、最高裁判事や裁判長もいました。唯一の外国人であり若かつた20代の私にとっては、誇らしい気持ちと同時に畏れをも感じる集まりでした。

天野氏は後に最高裁裁判官に任命されるほど有能な弁護士でありながら、非常に温厚で親しみやすい方でした。年は離れていましたがお互いにサッカーが好きだということがわかると、一気に親密になったのです。天野氏は学生時代にサッカーをやっておられたとのこと。私は当時ゴールキーパーとして現役でプレーしており、時折日本サッカー協会のお手伝いもしていました。そんなわけで、国立競技場での試合にお招きするようになり、協会幹部であった平井富三郎さん、島田秀夫さん、長沼健さんや岡野俊一郎さんにご紹介もいたしました。毎回熱心に観戦され、交代選手名や時間にいたるまで試合の詳細をプログラムに記入されていました。湘南のご自宅から足繁くスタジアムに通われましたので協会関係者にも良く知られる存在となり、サッカー談義に花を咲かせることも多かったようです。

1986年に在日36年を迎えた私は永住者在留資格取得を決意し、天野氏に保証人をお願いしました。即座にご快諾いただき、その上、申請手続きにも同行すると断言されました。事前に担当者へ連絡をしてくださっていたので、入国管理局では非常に丁重に迎えられました。受付には大勢の人が待っていたにもかかわらず、私の申請手続きは別室にてあっという間に終わってしまいました。また、通常であれば少なくとも数ヶ月を要するところ、数週間という異例の速さで取得できたのはひとえに天野氏のご尽力の賜物と今でも感謝しています。

このことは天野氏の、人に対する思いやりの深さや慈しみの心を表す好例ではないでしょうか。

また、友人のためには求められていること以上の事をするのが当然と考えていたようです。

ご高齢になられてからはスタジアムで観戦することは少なくなりましたが、時々食事をご一緒し、最新のサッカー情報を交換し合っていました。

天野氏は誰にでも親切で落ち着きのある物腰の柔らかな紳士でした。もしご存命ならば、昨年100歳のお誕生日を迎えられたはずでした。今年も国立競技場へ足を運ぶたびに、一抹の寂しさとともに天野氏を懐かしく思い出すことでしょう。

［1931年イギリス生まれ。現役時代はYCACのGKとして活躍。日本サッカー協会顧問として、英国との橋渡し役を務める。詳しく桑田さんの原稿を参照。］

Dear Kuwata-san,　　14th March 2009

Here is the short article which you asked me to write about Buichi Amano. I hope it is OK, and not too long or too short. If you feel that it should be changed in some way to be more suitable, then please feel free to do so as you wish.

Hope to see you at a game soon - either in Tokyo or Yokohama - and meanwhile trust you are keeping well.

Very best regards as always,

Yours sincerely,

Mac

（桑田さん宛の手紙より）

目次

情熱と誇り＊湘南サッカーを貫くもの＊　川井陽一……8
表現力～思い出ずる言葉～　宮原孝雄……9
「岩渕先生の思い出」　鈴木中……10
OBの皆様から……11
中村正義／海老原謙／早川純生／池田宗吉／
松岡巌／桑田孝／原田徳夫／前田正晶／
栗原克夫／柳川明信／山本修／中原弘巳／
丸屋喬／牧村英樹／香川彰男／福井民雄／
関口真／小泉治子／結城亮太／平田緩和／
中園真介／阿見潔／森下誠／黒鳥偉作／浅野雅人／
ペガサスクラブの意義（柳川明信）……36
親子・兄弟で（編集部）……36
現監督　小林周太郎……37
現役戦績（平成14年～21年）……38
編集後記……39

表紙／岩渕先生の遺品より　撮影＝黒木武浩
ボールの下のユニフォーム背番号「09」は先生のお誕生年1909年を表わしています。
裏表紙／グラウンドから見た湘南高校　絵＝鈴木中

情熱と誇り

～湘南サッカーを貫くもの～

湘南高校校長　川井陽一

手元に、湘南『三十周年記念誌』がある。表紙には「湘南」の文字が大きく描かれ、その下に「1951」、そして「創立三十週年記念」とある。

湘南サッカーを考えるに当たり、『三十周年記念誌』所収の「三十年の歩み」から、蹴球に関する主な項目を拾い、若干のコメントを加えることから始めてみたい。なお、サッカー部の歩みについて詳しい『湘南サッカー　半世紀を経て』（以下『半世紀を経て』と略記）も大いに参考にさせていただいたことを予めお断りしておきたい。

まずは昭和五年。「蹴球部全国中等学校関東大会で抽籤負け」とあり、「県で優勝し、関東大会で青山師範と引分け抽籤で敗れる」と続いている。同年は、「上級学校進学者114名は開校以来の記録」の年であり、「御大典記念プール起工」の年でもある。湘南中学が上昇期にある中、関東大会で惜しくも敗れたとはいえ、蹴球部の県下優勝が、生徒・職員を大いに奮い立たせたことは想像に難くない。

昭和九年。「春原、加藤先生外四名着任。新任歓迎蹴球試合の始り」。校長の身である私としては、「外四名」という記述が気になるところであるが、それは措き、新たに着任された先生を歓迎するためにサッカーの試合を行うというところに、湘南におけるサッカーのもつ特別の意味を感じている。

昭和十二年。「蹴球部初の甲子園出場」。「全国蹴球大会山、神、静、予選に優勝した蹴球部は初の甲子園に出場」。野球部ではなく蹴球部の甲子園出場である。（ちなみに、『半世紀を経て』所収の16回奥本氏の文章には「甲子園南運動場」とある）。ともあれ、全国大会出場に学校が大いに沸いたことは間違いない。

昭和十六年。「各運動部の活躍」。「この春以来蹴球、マラソン、排球、県下に優勝、特に蹴球全関東大会にて青山師範に勝ち優勝した」。昭和五年の雪辱を見事果たしたということになろうか。

昭和二十一年。「蹴球部全国制覇」。「終戦後の空白状態からいち早く立上る為にまず生徒に運動を奨励、学生スポーツの復興と共に蹴球部は山、神、静地方予選に優勝、更に全国制覇の途に上り、西宮球場にて神戸一中と対戦3対2にて優勝した」。改めてコメントするまでもないであろう。湘南の歴史に燦然と輝く快挙である。赤木先生が寄せられた「球を蹴り」の漢詩はあまりにも有名であり、また『半世紀を経て』に寄せられた22回の松浦氏、桑田氏、香川氏の文章は、当時の感動を余すところなく伝えてくれる。

もうひとつだけ『三十周年記念誌』から引用したい。「生徒会活動の現状」と題する8ページに及ぶ紹介の劈頭を飾るのが蹴球部であり、以下の説明がなされている。

「創立以来、校技として内外から認められて来た蹴球部の産婆役は現秦野高校長金持先生、長期にわたる強力な保育係が現小田高校長香川先生、・・・伝統の強さは蹴球湘南の名を讃えられつつ今日に及んだ。顧問は鉄槌役の原田先生で、優秀な先輩群のなかにはアジアオリンピックの田村君を始め多士済々であるが、十年一日の如く黙々と後輩指導に精進せられる岩渕君の努力は、特に記して感謝の意を表わす」。湘南サッカーを育てられた方々のお名前に、サッカー部OBの皆様は、特別の感慨を覚えられることと思われる。『半世紀を経て』所収の香川先生、天野OB会長始め諸氏の文章、あるいは岩渕先生を偲んで「岩渕二郎追悼の部」に寄せられた文章は、直接は存じ上げぬ私のような者にも、湘南サッカーとは何か、あるいは、湘南サッカーに流れる情熱、ひたむきさ、さらには湘南そのものへの思い等が伝わってくる。

『三十周年記念誌』を読みながら、創立以来、サッカー部がそしてサッカーが、湘南において保ち続けた位置、その特別の意味合いを感じないわけにはいかない。さらに『半世紀を経て』や『OB会報』を読む中で、サッカーが湘南において特別の意味を持っている理由にも思いを致さざるを得ない。その理由は、湘南サッカー部で活動された皆様のサッカーに賭ける「情熱」、さらには「校技」であるサッカーを選ばれた皆様自身のサッカーはもとより湘南に対するひいては生き方そのものに対する「誇りと責任感」にあると感じている。

湘南高校は、間もなく九十周年を迎える。その間、変わらずにあるのが「文武両道」の伝統であり、目標を高く掲げ挑戦する姿勢であると思っている。「PTA広報誌「湘南」78号」（2008）に、部活動における各部の「ひとこと」を集めた記事がある。その中で、唯一「全国制覇」を掲げたのがサッカー部であった。日頃より後輩である現役生に深いご理解と温かいご支援をいただいているサッカー部OBの皆様に深い感謝を捧げつつ、赤木先生が目指し、皆様が目指し体現された湘南の理想を生徒、職員共々私も追求し実現したいと思っている。

何よりも、サッカー部に関わりをもた

れた全ての方々の「情熱と誇り」は、現役の生徒に受け継がれ、今後湘南サッカーに加わるであろう未来の生徒にもしっかりと引き継がれていくことを確信している。

表現力

～思い出ずる言葉～

昭31～35年
部長・監督　宮原孝雄

現在の自分があるのは、『あの人々の出会い』があったからだと云う思いを持つ人は多いと思う。

私の生涯を決定づけた方は二人いらっしゃる。一人は東京高師から早大に転学し、日本代表選手となった松永碩（まつなが・せき）氏である。松永氏は長兄の行（あきら）氏、次兄の信夫氏と共に松永3兄弟としてあまりにも有名である。この方に高校時代に出会い、サッカーの指導を受け、東京教育大学に進学し、大学4年間は一緒に過ごさせていただいた。現在も年に数回はお会いし、サッカーを中心に思い出ばなしなど歓談しているが、湘南については志太中（藤枝東）時代に対戦し、『あんな強いチームはなかった』とよく云われた。湘南のOBの方では早川純生氏、海老原純氏、松岡厳氏、桑田孝氏のことなどはよく話されている。

もう一人が岩渕二郎先生です。1954年（昭和29年）に湘南の体育の教師であった原田源次先生が故郷に帰ることになり空席となるや、時の松川校長に直談判し、サッカー専門の体育教師の採用が決まったのである。先生は関東大学リーグを視察に来られ、運よく私の湘南行が決定し、大学4年生の身分で12月から非常勤講師となり、翌年4月に本採用となったのである。

先生は湘南サッカーにとっては、OBに多くの人脈を持ち、（みんな、わしの弟子じゃと云われ）威厳に満ちた存在であった。楽天の野村監督が著書の中で監督の要件として、信頼・人望・度量・威厳・貫録・表現力・判断力・決断力をあげている。先生は全部持ち合わせているが、私が面白いと思ったのは8項目の中に表現力が入っていることである。

そこで、今回は前回と趣を異にし、先生の表現力について特異なものを思い出ずるままに書いてみたい。

①　サッカーは好きだからやる

サッカーを何故やるか、それは好きだからだ。人間形成でも体力向上でもない。これらは好きでやっていて付随的についてくるものだ。そして自然に心と体は鍛えられるのだ。

②　堪能選手をつくろう

ウイングをさせたら県下逸品、センターバックは誰にも引けを取らない。見ていてそのプレーが楽しくなる堪能選手をつくろうとよく云われた。スポーツ指導で欠点矯正が重視されたが、長所を伸ばすことが大切。欠点矯正を重視すると長所が失われてしまう。日本における欠点指摘文化への警鐘であった。

③　門（かんぬき）戦法を用いよう

現在のプレミアリーグの名門アーセナルの話をよくしていた。WMシステムが主流の時代、ゴール前にスイーパーを配置するアーセナルの門（門のとびらや戸を堅く締める横木）戦法は変則フォーメーションとして、当時としては非常にユニークなもので先生の研究熱心さと先見性を物語っている。

④　教師のバランス

教師はしたしまれるところ5分、尊敬されるところ3分、バカにされるところ2分、これくらいのバランスでよい。教師としての初心者で威厳も貫録も全くなかった私への思いやりの言葉である。これで自信が持てました。

⑤　アルバムと家計簿を大事に

最後に私事に関すること、私の結婚式に来賓として、ご出席いただいた時の祝辞「新しい人生は記録が大切。金銭出納は家計の計画経済の初歩。したがって私はお祝にアルバムと家計簿を贈ります。」と述べられた。先生らしい、これまたユニークな贈物でした。

その他、酒席で『女性は偶像化するな』『医者の云うことは5割引』などのお話は面白かったが詳しく書くと支障があるので止める。

私が湘南から県教委に赴任する時は「県下の小中の校庭に全部サッカーゴールを設置することを使命と思って下さい」と云われた。サッカーの普及奨励を目指す言葉でした。

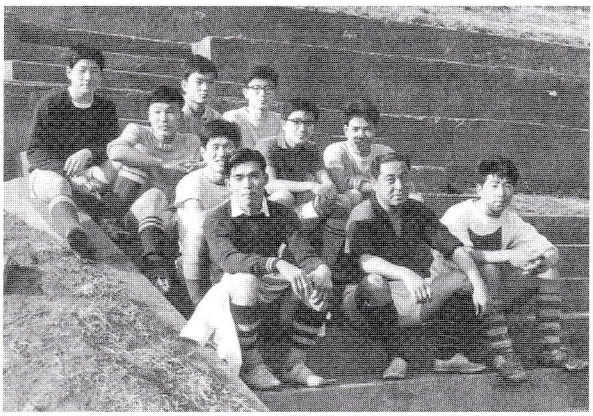
私は6年間を湘南で過ごさせていただきましたが、サッカーについては、しっかりとした指導理論もなく稚拙な指導に終始し汗顔のいたりです。何時だったか湘南サッカーのOBの集りがあり、私の在職中の生徒を中心に私の席を設けてくださり楽しい想い出ばなしに興じていた時、時の桑田会長が「先生はいいね。いくつになっても先生は先生だね。」と云われました。まことに教師冥利につきま

す。

昨年は柳川・松本両氏を混じえ、私の在職中の生徒の集いがあり、サッカーシューズを贈っていただきました。ウォーキング兼用ですので専らウォーキングに使っております。

思えば湘南で過ごした6年間は歌の題名ではないが「思えば遠くへ来たものだ」であり、一炊の夢の様です。よい夢をみさせていただき、よい思いをさせていただき、心から感謝しております。ありがとうございました。

半世紀以上経過しましたので、依頼された内容とは異なり、思い出中心になりました。



（昭和36年卒、関東準優勝の3年生と）

「岩渕先生の思い出」

昭36～63年
部長・監督　鈴木　中

岩渕二郎先生

（明治45年～昭和55年・70歳没）

「ガンブチさん」その名のとおり頑固一徹、サッカーキチガイだった。しかし私にとってはかけがえのない素晴らしい、人間味のある「湘南高校サッカー部」を愛した「オヤジ」だった。毎年春秋の彼岸には大庭霊園に墓参りをして湘南高校現役の状況を報告している。この親父の話を書き出すと次から次へと楽しい思い出が出てくる「蹴球院殿快速得点居士」と生前に自分で戒名を作られ、今でも芝生墓地で楽しくボールを蹴っているのだろう。

私も古希を過ぎ最近は特にガンさんの気持ちが解る様になり、今更ながら偉大なる先輩だったと感ずる今日この頃である。

ガンさんが「残された文章」を此処ですべて紹介するのは、難しいので項目だけにしたい。

◎湘南サッカー小史　草創の時代の古い記録（大正10年から15年頃の貴重な記録）

◎指導者への覚書　◎前編◎後編がある。（原稿用紙26枚）

◎放語録　戦後間もない頃のもの（原稿用紙30枚）

「その中の1文」面白いものを2、3紹介しよう。

1、（勝敗の問題）指導者の責任は、指導するチームを勝たせるにある。スポーツは人間最高能力の競争だから、競技者の有形無形の要素が総合され、非常に高度な状態に無ければ勝つ事は出来ない。闘争欲然り、運動神経、筋力然り、理性亦然り、鍛錬工夫然り、高い特性を具えたチームでなければ、永遠の勝利を得る事は出来ない。指導者はこの意味で徳育者でなければならない。

2、（理想主義のこと）目標は高い程良い、隣のチームなど目標にするな。目標に向かっての一歩一歩精進の過程にのみ人生の真の歓喜がある。目標は目的ではない。目標に達しなくても必ずしもスポーツの目的の失敗者ではない。

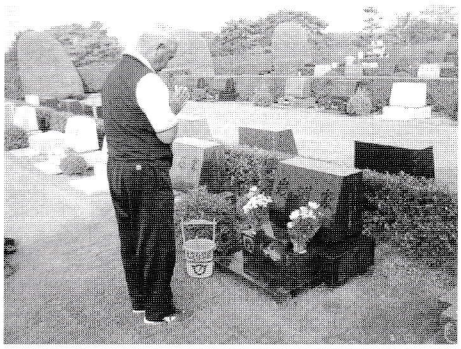
3、（◎体験）私が十数年の間、文字通り血と汗とで肉体に刻みつけた経験は、「精神力だけでは、フットボールの試合には勝てない」ということだ。十数年のあいだ血流を呑んだものだが・・・「フットボールは技術＋頭脳＋精神力だ・・・」

○昭和41年関東大会優勝の宿舎で◎パチンコの景品・毎日勝った勝ったと言いながら選手たちにチョコレート・キャラメル等景品らしきものを配っていた（実は買った・・様だ）

○香川先生との仲◎昭和40年頃校長と定時制教諭との関係（両者譲らず・・・）

○現石原東京都知事の事　OB会名簿から抹殺・・・ガンさんが破門するとの鶴の一声

○書きたい事が沢山あるが紙面の関係で項目だけでお許し下さい。



（2008・9・大庭霊園墓参り）

OBの皆様から

「球を蹴る」から「サッカー部」創設へ

昭3年卒　中村正義

天野武一さん・1回生と岩渕二郎さん・2回生について、想い出を綴るよう依頼を受けました。お二人とも生きていらっしゃれば百歳を越えられている方々で、サッカー部を創設され、また、部の活動に大変貢献された選手でもいらっしゃいました。

天野武一さんは鎌倉師範付属小学校から、岩渕二郎さんは鎌倉尋常小学校から、3回生の私は同じ鎌倉師範付属小学校から湘南中学に入学しました。私どもは皆、鎌倉に住んでいましたので、鎌倉から大船・乗り換えて藤沢へ、の通学路はご一緒になることになりました。

湘南中学サッカー部は、赤木愛太郎校長がサッカー精神を尊重され、絶大な推進力と維持力を注がれました。まず、東京高等師範学校の代表選手で、上海でのアジア蹴球選手権大会に選ばれて、ゲームでは素晴らしい成績をおさめられた後藤基胤先生をお迎えになったことです。後藤先生は数学の教師で私どもは授業を受けるようになりました。先生は休みの時間・放課後は校庭で蹴球のボールを、手は絶対に使わないで足だけで見事な技をご披露なさいました。たちまち全校生徒は先生の妙技に魅せられるようになりました。天野武一さんも岩渕二郎さんもその中にいらしたことでしょう。まだ、サッカー部という形態はできていませんでしたが、「球を蹴る」グループがたくさん出現しました。天野武一さんと令弟の健二さん、俊三さんはひとつのグループをつくられました。

後藤先生から、サッカーについては白紙の私どもに、実技と理論を教えていただくことになりました。私はしばらく傍観者で自分なりに球を追い、一瞬足でとどめ蹴っているうちに、グループの一員になりたいと思うようになりました。そして、息切れもせずボールをドリブルし、パスし、パスを受けキックする楽しみを味わうようになりました。一人だけの時は、長いコンクリートのスタンドの壁にたたきつけては、跳ね返ってくるボールを蹴るという時間も楽しいものでした。

私が通っていた鎌倉師範付属小学校校長の河村先生は全校生徒にマラソンを奨励されました。体育の時間、低学年は校内の短いコース、高学年は校門を出て鎌倉の山を背にした校舎から、由比ガ浜まで直線距離を走り、海に沿って材木座まで行き学校に戻るというコースでした。私も一年から六年まで走りました。後任の成瀬校長も体育時間のこのマラソンを受け継がれました。サッカーの試合は、前半45分後半45分、息つく暇なく走るゲームです。肺呼吸・ポンプとしての心臓機能ともに連続活動を要求されますが、小学校時代のマラソンが役に立ちました。

私は、湘南中学2年生からサッカーをはじめ、部員になってから、フォアードのレフトウィングのポジションを与えられました。3年になるとサッカーを校技とする県内の中学校のチームと試合をするようになりました。部長は金持嘉一先生でした。チームのキャプテンは岩渕二郎さん、メンバーは4年生の天野健二さん、石田貞一さん、伊藤基彦さん、木下富太郎さん、そして志賀昇さん、3年生では真田孝さん、石渡由之（旧制　小川）さん、中村清康さんと私、2年生では高梨春雄さんでした。

「サッカー部」創設時代の、懐かしい思い出です。（一部、不備等ございましたら、ご連絡のうえ、お許しください。）

※　編集部注＝「落ち穂」として追加寄稿を頂きました。

赤木校長は気安く生徒と話をされました。サッカー部員の練習をスタンドで見

ていらした校長に声をかけました。「先生、湘南という言葉はどういう意味がありますか？」と。校長はすかさず「藤沢に新設する中学校の名前を私に決めるように言われたので、私が決めた。名前は特に意味はないが、中国（当時は支那と称していた）の地方の名称で風光明媚な土地で、住民も清潔を誇りとしていた。私は湘南というところを訪れたことはないが、藤沢という土地を、住む人の努力で、好感の持てる住宅環境に築き上げていきたい」と、希望を述べられました。私には忘れられないお言葉です。

「2009年7月99歳になられ、今回執筆者最高齢です。サッカー部創設期の貴重なお話を頂きました。現在、教会の奉仕活動をされているそうです。」

人生とサッカー

昭17年卒　海老原　謙

60年以上も前の話ですが、謙・純・朗・俊4兄弟が湘南中、蹴球部に在籍していたことは今でも誇りです。（末弟はミソッカスでしたが……）本当にマメなOB幹事の桑田君が未だに忘れずに折りにふれて連絡をくれる事は感謝に耐えません。その都度楽しかった青春、「藤沢」が脳裏をよぎります。全く変わり果てた駅南口の銀座アスターでの、年1回の同級会には今もかかさず出席しています。あの頃、香川部長（地理）の5ヶ年計画とやらで全国制覇をめざしていました。4年生の時は甲子園で敗れ、翌年捲土重来を期して猛練習中に（昭和16年）太平洋戦争勃発のため全国大会は中止となりましたが「全関東」は開催され明治神宮球場で、青山師範との決勝戦は延長戦の末、私のヘディングで優勝しました。講堂で全校生徒を前に、浅沼部長（数学）が「海老原のスライディングヘッドが相手ゴールキーパーの股間をぬって2連覇した」と満面の笑みで報告された時、涙など出もしないのに泣き真似をしたおぼえがあります。また全国大会出場のための「山神静」（山梨、神奈川、静岡）予選で甲府に遠征優勝した時は、コワイ「岩ブチ」コーチに「お前は今大会圧巻であった」とホメられた事は皆が忘れていても私の記憶の中に生きています。夏休みの日々、練習に明け暮れた吾々をポケットに入れた小石を投げつけながら「もっと走れ」と叱咤激励していた故岩ブチ（ガン）さん、ライトウィング一筋だった私はライン沿いに遮二無二突っ走りゴールライン間際でセンターリングするのが仕事でしたから隣のバレーボールコートとの柵に激突することもしばしばで「ノーブレーキ」と云われたものでした。3年生の時には生意気だと云って上級生（4年競技部）に殴られましたが訊きつけた田村キャプテン（5年生、通称ヌルさん）が本人を呼びつけて「よくも部員をなぐったナ・謝れ！」と土下座させました。「長幼序あり」の時代ですが、故ヌルさんの面影は今も忘れません。話しは変りますが、母は105才まで生き最后は自院で看取りましたが晩年「お前達は球ばかり蹴って勉強しないので進学も覚つかないと思い赤城校長先生に蹴球部をやめさせたいとお願いに行ったが、先生は『心配しないで大丈夫ですよ。私の息子も浪人中ですよ』と云ってとり合ってくれなかったが、これでよかったんだね」と云っていました。人生って紆余曲折です。思い出は尽きませんが現在は千葉県鴨川市で療養病院、有料老人ホーム、身障者施設など315床と職社員250名をかかえ、世代交替のため残り少ない人生を歩みつづけています。

かつては　Boys be ambitious

今は　Unity of diversity　をモットーに。

曾孫たちに幸あれ。　85才。

サッカーの思い出
―国際審判員

昭18年卒　早川純生

サッカーは、私にとっては、ボールを蹴ることではなく笛を吹くことである。いつの間にか国際審判員となり、20年を経てグランドを去った。この間のことを記す。

○昭和20年秋（終戦後）
湘南の校内大会の決勝戦の笛を吹いた。これが、審判の始まり。

○昭和27年（1952年）頃
日本協会が開いた第1回審判講習会に参加し、正式に審判員となった。審判手帳の登録番号は10番台であるが、手帳所在不明。

○昭和34年（1959年）早慶ナイター
この年、皇太子殿下は美智子様と結婚されたので、早慶戦の関係者が皇太子、妃殿下に観戦していただくよう計り、そのとおりになった。試合が早慶なら審判は東大ということで、小生に役がまわってきた。例年よりも観衆は多かったが、問題もなく終わり、ホッとした。

○昭和36年（1961年）
マレーシア国ムルデカ大会、韓国アジア杯大会参加。この頃は国際大会が少なかったが、ムルデカ大会は重要な大会であった。主審1回、線審2回を与えられた。大会の審判部長から、FIFAの正式バッジをとるには、A級の2試合を経験することが必要と告げられた。同年秋のアジア杯大会では審判員が不足のため、大会の途中から召集され、主審、線審各1回を経験し、FIFAバッジを得た。

○
昭和39年（1964年）
アジアユース大会（ベトナム）
事前の打ち合わせなく空港に行ったところ、団長は湘南高校々長の香川先生であった。この大会は高体連のサッカー部長が団長になるという。珍しいめぐりあわせ。先生は大会の途中の休日にタイに出かけるほどの元気であり、驚いた。準決勝、三位決定戦の笛を吹く。新聞記者による審判のランク付けでは上位。

○昭和39年（1964年）
東京オリンピック
予選リーグ、三位決定戦の審判を担当した。予選では、FWと相手バックが争い、相手を蹴りあうのが見えたので旗をあげたが、蹴ったプレーヤーを特定できないでいると、主審の福島さんにうまくまとめてもらい、ゲームを再開できた。機関紙のオリンピック特集号には、オシム氏の名があった。

○国際審判員を目指した理由？
すべてのプレーヤーが全日本代表を目指すのであれば、技術的、体力的に無理。審判員（7名）を目指す人は、その頃少なかったので、これならいけると考えたのが理由だろうか。

○審判として最近のプレーを見ると、
無茶なプレーが多すぎる。サッカーは紳士のゲームである。ヒゲを汚く生やしてテレビの画面に出てきたり、プレーするのはモッテのほか。審判は非紳士的プレーを見逃すことなく、ゲームをコントロールしてほしい。

『異体同心』の原点は湘南サッカー部

昭18年11月卒　池田宗吉

私が古希を迎えた平成九年に、自分の来し方を総括してみようと思い立って筆を執り、翌平成十年に自分史『江田島からの転生～二つの日本に生かされて～』を上梓した。早いものであれから十余年の時が流れた。当然のことながら母校湘南中学時代を偲ぶ随想には相応の紙面を割いた。母校にまつわる思い出は鮮烈で、敬愛してやまない恩師のこと、部員として全国大会に臨み、血わき肉踊ったサッカー部のこと、同期会「一体（一九）会」のこと、さらに兄・私・弟が続けて母校に在学したことなどを同書に書き留めている。

因みに私の湘南中学入学は昭和十四年、戦時下の特別措置として昭和十八年十一月に繰り上げ卒業（第十九回生）した。そして同年十二月一日には第七十五期生徒として海軍兵学校の入校式に臨んでいる。

湘南中学での教育の厳しさは、教科学習の面のみならず、精神教育の重視という点でも特徴付けられる。それはますます拡大の一途をたどる戦時体制の影響であり、またその要請によるものでもあった。私には「団結力」の何たるかを教えられたことが強く印象に残っている。校風は文武両道を奨励するものであったし、精神教育の実践の場として体育科目が重要視されたことや、学内行事として開催された全員参加の「組別対抗試合」を特筆したい。

さて、私は、今でいう「部活」、つまリスポーツ種目のクラブ活動としてサッカー部に籍を置いた。往時の母校は予選ブロック「山神静」（山梨、神奈川、静岡）の雄としての伝統もあり、その実力は常に全国レベルにあった。私の頃はといえば、昭和十四年の第二十一回全国中学選手権大会と、翌昭和十五年の第二十二回大会に、山神静代表として連続出場を果たしているが、残念ながら私はまだ補欠部員であった。実力も身につき、レギュラーのポジション争いに加わった昭和十六年（三年生）と翌十七年（四年生）の両大会は、あろうことか、戦争のために大会の開催そのものが中止の憂き目をみることになり、全国大会出場の夢は無念にも果たすことができなかった。

しかし、この全国中学選手権大会に代って、昭和十七年八月二十二日より、文部省・学振主催による「第一回体育大会（中等大会）」が開催されるところとなり、わが湘南中学は見事に山神静代表の座を射止め、西宮と甲子園を競技会場として開かれた全国大会に出場することが出来た。

大会三日目に当たる八月二十五日にわが校は第二回戦より登場し、西宮競技場で四国代表高知商業と対戦。前半2対1、後半3対0の合計5対1で勝利し、準決勝進出を決めた。この試合で私はゴールキーパーでフル出場した。翌八月

二十六日の大会四日目、準決勝に駒を進めたわが校は、舞台を西宮から甲子園（南運動場）に移して西中国代表広島の修道中学と対戦したが、善戦空しく前半0対0、後半0対3の合計0対3で敗退し、決勝戦進出を逃した。

結果はともかく、全国大会出場までの長い道程において、全力を出し尽くした敢闘の精神と、そこに培われたチームワークと団結の力は、私にとって終生忘れることの出来ない心の糧となって生き続けている。またこの伝統は後輩たちにしっかりと受け継がれ、戦後第一回の国体（昭和二十一年）での全国制覇という快挙につながった。

本題に戻って、組織の活力が存分に引き出されるためには、違う環境で育った者同士が同じ目標に向かって努力する「異体同心」の精神が大切だと私は信じている。海軍兵学校で受けた厳しい教育の中にも「全体意識の高揚」が常に指導の主眼とされ、「俺が、オレが・・・」という自我の主張は存在する余地すらなかった。個人の失敗が全体の責任とされたのも、艦が沈むときに、一個人の責任を云々しても始まらないという考えが根本にあったものと理解している。企業の活動もまた然りで、この想念は、おおよそ半世紀に及ぶ商社マン人生を送った私の痛切なまでの実感である。

私の好きな言葉、座右の銘とも人生訓―ともいえる『異体同心』の原点は、湘南中学のサッカー部に在ったと思っている。

我がサッカー人生に悔いはなし

昭22年卒　松岡　巖

湘南サッカー部創立九十年おめでとうございます。

九十年の年月は決して短いものではありません、又その間のサッカー部の歩みは必ずしも平坦なものではなく、まさに多くの人たちの汗と泥とにまみれた苦闘と努力によって刻まれたものです。

サッカー部が誕生してから九十年の間には種々の事がありました。多数の仲間が戦争や病で亡くなられました。これらの方々との交流は今も私のまぶたに鮮やかに浮かび、その仲間と一緒に九十年を祝う事が出来ないのは本当に残念に思っています。

湘南サッカー部が発足してから九十年、私も子供心にサッカーの魅力にとりつかれてボールを蹴り始めてから七十年になります。過ぎ去った若い時代の回想と云うか追憶と云うべきか、思い出すままに筆を執っていきたいと思いますが、サッカー界との繋がりがあまりにも長く深いだけに取り留めないものになってしまうので、その時々で痛烈な印象に残っている思いでを綴ってみたいと思います。

湘南中学時代はまさに戦争の真只中で学生生活を送りました。我々は農村に工場に勤労動員を強制された時代でした。本格的な部活動の思い出は戦後、部が再スタートして昭和二十一年に第一回国体で神戸一中に勝って全国大会初優勝した時の事が忘れられません。

昭和二十年の中学の一般レベルは未だ低く、関東では敵らしい敵はいませんでした。香川・桑田・海老原・宮沢・山中・松浦・矢住・佐々木・松岡の4年生、早川（小林）・佐々木・三橋・原田・下の3年生、小田島・村主・香川（稔）の2年生のメンバーでチームの編成に当たりました。ボールも靴も自分で繕いながらでしたが、解放された母校の広いグランドに戻って伸び伸びとボールを蹴ることの出来る解放感にみんな満ち溢れていました。

二十一年春から県下の中学リーグ戦が復活し連戦連勝で強さを誇りました。新年度のチームは主将海老原が水戸高校に進学が決まり、香川が主将を務めました。先生は香川先生が部長、千田先生が副部長を務められ熱心にサッカー部を指導されました。その他OBの皆様も戦地から戻られ、グランドに集まり指導戴きました。監督には後に東大や全日本のチームで活躍された大埜先輩が選ばれ、鎌倉の自宅から毎日グランドに現れ熱心に指導して戴きました。

県下の予選は大量得点で勝ち抜き、東日本地区の予選は高師付属・浦和・韮崎・真岡などに勝ち抜きました。決勝戦は仙台一中と対戦し延長の末、1対0で勝ち東日本の代表に決まり、日本一を賭けて大阪に向かい西日本代表の神戸一中と対戦しました。試合は前半1対0でリードされましたが後半3点を奪い逆転優勝しました。最後の1点はタイムアップ一分前に桑田のロングシュートがゴール左隅に決まった劇的なものでした。

決勝戦のメンバーはGK佐々木、FB松浦・山中、HB原田・松岡・三橋、FW桑田・下・村主・香川・宮沢で、CFとして予選を勝ち抜いた早川が出発前の練習で負傷し残念ながらプレー出来ませんでした。優勝のしるしは一枚の賞状でしたが、帰校して全生徒の前で報告会を開き全校で喜びを分かち合いました。この事はやはり忘れ難い痛烈な体験であり、湘南サッカー部の歴史に大きな一ページを記した事は間違いないと思っ

ています。

その後昭和二十二年に慶応大学に入学し、センターバックとして、一年生からレギュラーで出場しました。当時の関東大学リーグ一部は早慶東の三強の争いでした。又、湘南のOBは早大の田村さん・桑田さん・小田島さん、東大の大埜さん・早川さん・海老原さん・八星さん、慶大の松岡・小林（早川）さん、千葉医大の安保さん、戸澤さん、明治大の山口さん等々それぞれの大学で中心選手として活躍されていた時代で、大学の東西対抗戦では湘南中対神戸一中の戦いの様に両校OBが選抜されて戦っていました。正に湘南中の黄金時代ではなかったかと思います。

慶応大では昭和二十六年に第一回の天皇杯全日本選手権にキャプテンとして出場し、当時全日本代表選手八人が所属して最強と云われた全大阪を延長戦の末3対2で破り、第一回の天皇杯を受け取った時の痛烈な思い出が今も忘れられません。

昭和二十七年に日立製作所に入社しました。そしてチームの一員として実業団で最強だった田辺製薬に決勝で何度も対戦し敗れましたが、昭和三十三年にやっと全国実業団サッカー大会で優勝することが出来ました。小田島君がチームの一員として頑張ってくれました。これも大きな思い出の一つとして残っています。

昭和二十九年から三十四年まで慶応の監督を務めましたが、昭和三十年・三十一年と全慶応BRBの監督として天皇杯二度優勝しました。この慶応時代は小林君に大変力になって貰いました。

今思い出してみますと天皇杯全日本選手権に選手として二回、監督として二回優勝し、日立に入り全国実業団大会で日本一となり、湘南中では第一回国体優勝出来、私のサッカー人生は本当に良き先生・先輩・同僚・後輩に恵まれ、幸せなサッカー人生を歩むことが出来たと思います。故人になられた方々も多く居られますが、改めて皆様に心から御礼を申し上げたいと思います。

又、現在はサッカー界に後恩返しをしたいという気持ちで、日本サッカー後援会の会長をお引受けして居ります。是非皆様方の後援会に対する御支援をお願い致します。

天野武一さんとマクドナルド氏

2代目OB会長（平9～平13）
日本サッカー協会元監事、現参与
昭22年卒　桑田　孝

歴代のOBの中で湘南サッカーを愛し、一番情熱を注いだのが岩渕二郎氏ことガンブチさんだったということは万人が認めるところだが、89才で亡くなる年の一月まで半世紀を超す長い間、初代OB会長を勤められた第一回生の天野武一さんも岩渕さんに劣らず湘南サッカーを愛し続けた方だった。

天野さんがどれ程、湘南サッカーを愛し、気にしていたかは、亡くなられる前年の平成8年4月と亡くなられた平成9年の9月に私が貰った2通の葉書をご覧になると良く判ると思う。コピーを載せてもらうのでご覧頂きたい。（34ページご参照）

天野武一さんは3人兄弟の長男で、次男の俊三氏（2回生）、三男の豊雄氏（後に松村氏と改姓）共サッカー部、秀才3兄弟としても有名だった。天野武一さんがどれ程優秀だったかは新設校の1回生として当時難関だった静岡高等学校に4年で合格、東大卒業後は法曹界で名を上げ、最後は最高裁判所判事を勤められたことでも良く判ると思う。

マクドナルド氏は1931年生れの英国紳士。19才で来日したので、本年2010年で在日60年を迎える。来日直後から横浜YCACのGKとして大活躍した。

当時日本には芝生のグランドがYCACしかなかったので、どのチームも招待されると大喜びで行っていた。私も湘南OBの一員として大喜びで行っていたことを懐かしく思い出す。彼はその後、長沼君や岡野君（共に元日本サッカー協会会長）達に誘われ、東京都の代表チームの一員として都市対抗に出ていたもので、我々の年代で彼を知らないものはない。彼は現在、英国の代表になった人が何人も入っていて、戦後何回も来日した有名な英国のアマチュアチーム「ミドル・セックス・ワンダー」の名誉会長をしており、日本サッカー協会の顧問として、英国との橋渡しをしているだけでなく、日本サッカー協会の国際化にも一役買ってくれている。又、日本ロレックス（株）の社長もしていたので、実業界でも顔が広い。

このマクドナルド氏と天野さんの縁はもう50年も前からというのだが、私が知ったのはそんなに古いことではない。10年ちょっと前にマクドナルド氏より聞いて知ったのである。

天野さんは良く日本代表の試合を見に来ていたが、いつも一人で来て見ていたので皆んな気にしており、私が天野さんと話しているのを見た人から「桑田さん、あの方はどなたですか？」と聞かれたりもした。

この天野さんとマクドナルド氏の縁を是非「湘南サッカー部創立90周年記念誌」

に載せてもらいたいと思い、マクドナルド氏に投稿を頼んだところ快諾、寄稿してくれ載せることが出来、感謝している。自分からマクドナルド氏のことを一言も言わなかった天野さんは、本当の紳士であったとつくづく感じている。

―伝統と先輩に守られ、終戦後初めて全国優勝する湘南中サッカー―

昭24年卒　原田徳夫

昭和二十一年十一月三日、第一回国民体育大会で、決勝戦、3対2、神戸一中を下す。写真（35ページ）は、その時の西之宮球場。試合前で、皆、緊張した顔。松浦RB、三橋LH、香川嵩RI、村主CF（補欠）は既に亡くなっていない。ああ。

決勝戦の様子は、当時の部長香川幹一先生の「湘中だより湘南蹴球全国制覇の御礼の挨拶」にある。（原文は謄写印刷、当時の関係者は持っている。また「湘南サッカー半生期を経て　岩渕二郎追悼記念（P84～P88）」に印刷されている。

挨拶文の中の初代校長赤木愛太郎先生の漢詩があり、今も鮮明に覚えている。

球を蹴り球を蹴り複た球を蹴り
二十六年蹴り複た蹴る
甲子原頭全国を制す
国家再建複た球に似たり
（原文漢文）

まさに湘南中、初のサッカー全国制覇の年、日本再出発の年でもある。

―幻の優勝、全国大会決勝で広島大付属高に敗れる　第二回国体福岡大会―

第二回（昭和二十二年）の国体は、サッカー少年の部はなく、その代わり第二十六回全国中等大会があり、湘南中は県決勝戦で小田原中に敗退した。（最後の旧制中）第三回（昭和二十四年）国体福岡大会は勝ち進み決勝戦は広島大付属高校と当たる。

「幻の優勝（元早川現、小林の記録）湘南二三四会　われら黄金時代第一号」より

「（前略）ハーフラインを少しこえた辺りでのFKが直接ゴールに達し、GK川島がジャンプキャッチして降りたところを、相手FWに押し込まれ、ボールを抱えたままゴールを割り無念の失点となってしまった。（中略）当然ファウルの笛が鳴ったであろうが、当時としては極めてあたり前のチャージであった。（後略）」一方、私の原稿ではこう書かれている。「（前略）高3卒業最後の卒業年度の全国大会は、準決勝で終わった。しかし、これには、忘れられない裏話がある。

試合直前になっても相手チーム広大付属高は見えない。大会本部は慌てて宿舎に連絡すると、相手チームは時間を間違えてまだ宿舎にいる。本部は『このままでは湘南の不戦勝である』と。岩渕監督、早川キャプテン、選手一同『試合しないで優勝より、相手チームを待って堂々と勝負しよう』となった。

試合終了後、広大付属高キャプテンが、優勝の菊の植木鉢を持って『我々は試合には勝ったが、勝負には負けた』と頭を下げた。不戦勝を避け、遅れた相手を待ち、堂々と戦い、敗れはしたが、スポーツマンシップとして我が青春に悔いなしということか」

新制高校になって、初めての、全国大会準優勝の弁でもある。

岩渕さん（ガンブチさん）語録

昭26年卒　前田正晶

「サッカーとは『anticipation』のゲームである。次に何が起きるかを予測して動け」

―これは岩渕さんが言われたことかどうかの確信がありませんが、如何にもそれらしいので取り上げました。

「川島にフィスティング・アウトを教えていなかったのはわしの不覚だった。まさか、あのような場面があるとは思わなかったのが誤りだった。済まない」

―これは福岡での広島師範付属高にあのフリー・キックからの1点で、1対0で破れた後に、岩渕さんが我々に謝って言われた言葉です。記憶では非常に淡々と言われました。

さらに私の記憶では（酒井は違うと言いますが）センター・サークルの右側で酒井が右手に球が当たってハンドを取られました。そこからトー・キックで挙げられた球を川島さんがジャンプして捕って着地したところに、長沼と木村（？）が突っ込んできて、降りるところがなく、ゴールの中に倒れ込んだものでした。

「サッカーの勝負に番狂わせなどない。負けた方が弱いのだ」

「ファイン・プレー等というものはない。それはポジションが悪いか、スタートが遅れたかだけのことだ」

「ファイン・セーブが多いゴール・キーパーは下手だからだ。これも立ち位置が悪いか、前に出るのが遅いか、動きが

遅いからそうなるだけだ」

「図上戦術をいくらこうやって教えても、守る方がパスをカットしようとして空振りすることもあるし、またはジャスト・オーヴァーヘッドでバックの頭の上を越えることがあるので、空しいこともある」

「戦前に、今年の顔触れではダメだと思つたが、兎に角トライ・アングルのパスと、ストップとトラッピングだけを徹底的に練習させたところ、全国大会の準決勝まで行ったことがあつた。基礎の練習は徹底してやることだと再認識した」

「FWはこの位置に持ち込んだら必ずシュートを決められるところを作れ。そして、そこに持って行くようにしろ」

「シュートをする時には、自分が蹴りたい方向に手を出して、その動作で標的を定めろ」

「自陣でパスを貰って前が空いていたら真っ直ぐに自分のサイドのゴール・ポストを目指してドリブルしろ。それが必ずチャンスをもたらす」

「トライ・アングルをやる時は必ず相手のバックの直前まで持って行け。そしてギリギリのところでパスをしろ。そうすることで相手を一人振り切れる」

「FWは相手のゴールに背を向けて後ろから来たパスをトランピングする時は、一試合を通して必ず同じ方向にフェイントをかけろ。そして、これが決定的なチャンスだと思った時に反対の方向にフェイントをかける。相手は必ずその罠にかかる」

「後ろから来たパスを前に方向を変えてとラッピングする場合には、必ず自分が行きたい方向の反対に無意識でフェイントをかけるように心がけろ」

「右サイドのFWは左側から来たパスかセンターリングをシュートする場合には必ず左足で、左サイドの者は右足での原則を忘れるな」

—これは桑田さんと宮沢さんにも同じことを教えられました。

「左サイドの者は後ろから来たパスを進行方向にとトラッピングする時は、必ず右足で前に流せ。右サイドの者は左足で、だ。そうでないと進行方向に向けた動きを一旦止めることになる」

「今日の尾島は善戦健闘だった。だが、キャプテンともあろう者が、大事な試合の前に風邪を引いて体調を悪くしていては何もならない。しかも尾島の所から2点を取られて試合にも負けた。そういうことは批評の限りではない」—これは昭和25年秋の国体予選で、準決勝で小田原に1対2で負けた後の批評でした。

「シュートをする時はキーパーを狙え。そうすればお前たちの技術では目標から外れて得点になる」

「ゴール・キーパーは極力前に出て大きく手を広げろ。そうすれば相手のFWはほとんど空いているところがなくて蹴れなくなる」

—これはゴール・キーパーが単身ドリブルなり何なりで入つてきた相手を守る場合の心得として言われたことです。

「ゴール・キーパーが最も止めにくいのが膝から腰の間の高さのシュートだ。そこを狙え」

「味方のバックがクリヤーする体勢を見れば何処に来るかが解るものだ。そこに向かつて早く動いて拾ってやれ」

「柳川は将来性がある。子供の頃の田村恵にそっくりだから」

「試合が終わってヘラヘラ笑って立っておる者がいた。何たることか！負けた試合では全力を尽くして、終わった途端にグラウンドに倒れ込むようでなくてはならない。立っているとは言語道断だ」

「前田は全国制覇のような大目標を掲げたティームには不向きだ。野原の真ん中で、一人でボールを蹴らせれば上手いだろう。レクリエーションのサッカーには向いている」

「今年は5人も卒業して、ストレートで進学したのが前田一人か、それも私立か」

27年のキャプテンとして（岩渕さんの教え）

昭27年卒　栗原克夫

私が高校3年生の時、岩渕大先輩は東北地方にお住まいでした。日々の練習のこと、県大会の試合の様子とその結果、部員の健康状態などは、手紙で常時お知らせしておりましたので蹴球部の現状は

十分ご承知くださっていたと思います。

最初に岩渕さんにご意向をお伺いしたのは公式試合に出場するレギュラーメンバーを選出した時でした。原案を提示しましたところそのまま了承していただきましたが、ご返事いただいた手紙を読んだ時非常に驚いたことを覚えています。岩渕さんは湘南のグランドには偶にしかお見えにならないのにメンバー各人の体格や性格、プレイスタイル等よくご存知だったことです。

参考までに岩渕さんお墨付きのレギュラーメンバーをご披露します。ポジション名は現在の呼称と異なりますが、GK枝、RB柳川、LB土田、RH山本、CH田川、LH小瀬村、RW加藤RI栗原、CF嶋田、LI近藤、LW出口です。この中で、土田、嶋田、近藤が2年生であとは皆3年生です。当時のシステムは現在と異なり守備専門のバックスが2人、守備と攻撃の両方を受け持ち繋ぎ役をするハーフバックが3人、攻撃専門のフォワードが5人です。しかし我々は全員攻撃全員守備で戦うよう指導を受けました。岩渕さんから見ると我々湘南チームは身体では他校の選手よりひ弱に感じられていたようです。

岩渕さんの教えの基本は自分のすぐ隣に位置する人にインサイドキックで地を這うボールを強く正確に足もとに出すこと。パスを出す人と受ける人は常に動きながらパスをつないでボールをキープし攻め上がるというサッカーでした。夏休みの合宿練習に岩渕さんがお見えになった時は、この感覚を会得するため体育館でバスケットボールをしながら指導していただきました。この練習体験はその後の試合に大きく役立ったと思っています。

私は試合の状況と結果、次の試合の相手チーム名を手紙でお知らせしておりました。ご返事の手紙ではまるで岩渕さんが直接グランドで我々の試合をご覧になっていたかのように注意事項を含めこと細かにご教示いただきましたので練習に取り入れ成果をあげることが出来たと思っています。ある時、試合が終わった後で加藤君が岩渕さんらしき人が遠くの方で我々の試合を見ていたぞ、と言ったので、まさか？思いましたが…。今だに謎でございます。もちろん試合の日程と場所は前もってお知らせしてありますので、もしかしたら…と思いましたが、手紙での報告にはこの件は書きませんでした。

国体出場校を決める県大会の最初の試合で私は左手首を骨折し試合途中で病院にかつぎ込まれました。当時のルールでは選手交代は出来ません。私は自分の怪我より試合の方が心配でした。ギプスをしてグランドにもどったときに勝利したと聞いた時は安堵いたしました。私は数か月間試合には出られなくなったのでこの事を岩渕さんに手紙で伝え、私の代りに次の試合から出てもらう選手を2年生の武田君にしたいのでとご意見を仰ぎましたところ了承していただきました。

以後は私は練習は出来なかったけれどチームメイトと共に毎日グランドに出てチームの状況を把握し、試合の都度状況と結果を詳しく書いて報告しました。岩渕さんからは次の試合で対戦する相手チームについての注意事項やご意見を賜りました。もちろん諸先輩の方々も多数頻繁にお見えになり、いろいろとご指導を賜りました。

チーム全員が一体となり全力をあげて試合にのぞんでくれましたので優勝し県代表校になり、次は南関東代表を目ざすことになりえたのも、遠方からご指導くださいました岩渕大先輩はじめ数多くの諸先輩の方々が築いてこられた湘南蹴球部の伝統の力だと思います。残念乍ら東京代表校に敗れて南関東代表にはなれませんでした。

私は仕事の関係で宇都宮に来て、そのまま当地に住みつき世間では後期高齢者と呼ばれる年令になっていますが、栃木大昭サッカークラブの一員として楽しくボールを蹴ることが出来るのも湘南中学1年生の時からサッカーに親しみ続けてきた賜物と思っています。

湘南高校の現役諸君よ！　一度サイドキックだけで試合をしてみてはどうですか。きっと岩渕大先輩の偉大さが少しは理解出来るでしょう。

岩渕～宮原間
―コーチ時代―の湘南サッカー部

昭27年卒　柳川明信

私は昭和28年春～32年冬の間、前半は岩渕監督下のコーチ、後半は岩渕、宮原部長のお手伝いを務めました。

この間の特徴は現役指導の役割が数年代にわたる複数のOBから、専任の体育の先生による長期一貫性をもった現行の指導に移る過渡期でした。

現役への指導は創部以来岩渕さんを頂点に大学、社会人のOBが多数集団で行い、岩渕さん不在の期間コーチを置いた（藤田得利氏6期、嶋田正彦氏9期、大埜正雄氏15期、早川純生氏18期）との記録があります。

昭和21年全国制覇、23年同準優勝の戦後黄金期から20年代中後期にかけて、戦

前の全日本級のOB、大学のトップクラスになった黄金体験OBの方々が多数母校に来られ、旧制中学の気質を保つた充実した指導が行われました。

21年最後の旧制中学入学の私は湘南6年の間この雰囲気のなかで同期の栗原、山本、他、高校1期の嶋田、近藤君、2期の塩川君などと指導を受けました。

24年は準優勝の早川（小林）主将以下主力23期の卒業と進学転校者の続出で一気に戦力ダウン、折からの小田高の台頭（26年1月全国2位）高校3年間での選手の補強の限度など、このあたりから黄金期再現は無理になったと岩渕さんが言われておりました。それでも26年国体県予選で小田高を破り優勝（南関東で敗退）するほどの力は発揮しました。

28年岩渕さんが宮城から母校教壇に戻られましたが、旧制時代のかたがたは仕事で多忙、有力大学生OBは社会人へと指導力のあるOBが減り岩渕さんへの加重が増え、私に手伝いを命じられたわけです。

29年にはスイーパーをおいたボトルシステムを考案され県下は制し東日本3回戦まで進み、30年国体県決勝で不本意な敗北（笛の聴き間違い）をしたが一応の戦力は保持していました。

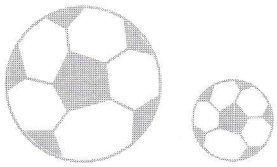
高校3年間での成果は難しく、より体系化した技術、新しい戦法、体力づくりなど長期指導の一貫性を感じられ（ご自身の体力も考え）専任の先生の招聘を考えられました。

宮原先生を迎え岩渕さんは総括的立場から発言され、宮原さんが実技指導（現役は新しい指導に目を輝かせて張り切り）、私が体力づくりと気合入れ、グランドは活気に満ちて新しい指導者を迎えました。これに刺激されたか大学生OBも以前より多く来てくれました。

（32年私は社会人になり、たまの訪問）

この体制作りと指導が35年関東大会準優勝、36年国体全国出場へと繋がっていったと思います。

このきびしい時代をしごきに耐え、頑張った29期～35期の諸君とはきずなが強く53年ペガサス結成時の主力メンバーで参加してくれたときは驚きと喜びでした。それはそれぞれの思いの中に湘南サッカーが生きつづけていたことと感深いところがありました。



湘南サッカーから60年

昭27年卒　山本　修

私がサッカーを始めたのは、昭和24年、湘南高校1年の時であった。

昭和48年、満40才まで24年間現役選手を続け、その後はOBとして、現在もシニア年令のサッカーに励んで、サッカー歴は通算60年になる。

湘南高サッカー部の3年間

私の世代は、戦後の学制改革の中、旧制中学最後の入学で、湘南中、湘南高と6年間、湘南に在学した。

旧制中学時代の湘南は創立以来のサッカー名門校で、昭和21年中学1年のとき第1回国民体育大会全国優勝、昭和23年中学3年のとき第3回国民体育大会全国準優勝などの輝かしい戦績、神奈川県内では無敵であった。しかし、新制高校に切り替わってからは、旧制中学の在学5年間に比べて、新制高校の3年間では選手育成期間が不足、新設された新制中学ではサッカーの普及が遅れて経験者の入学が少なく、さらに大学受験競争の激化により、サッカー部の実力レベルを維持することが困難で、神奈川県内で優勝することも難しいという環境であった。

私は、中学生の間、昼休みのサッカーやクラス対抗試合でサッカーを楽しんでいた。受験競争激化の中、同級生のサッカー部員は成績が下がると先生と親の圧力でサッカー部を辞めさせられて、部員が不足するようになり、私まで入部を勧誘されたというのが、私がサッカー部に入る契機であった。

昭和24年9月、国体県予選で小田原高に敗退し、岩渕監督の指示により3年生は引退、近藤新主将以下の新メンバーがスタートし、入部から数ヵ月の私も10月からの試合に出場するようになった。この年と翌昭和25年も、県内で優勝することはできなかった。

昭和26年、私が高校3年の国体予選では県予選に優勝して神奈川代表になったが、南関東予選で東京代表の北園高に敗退し、全国大会には出場できなかった。

関東大学リーグ1部の5年間

昭和27年、東京大学に入学してサッカー部に入り、1年余分に在学して、5年間サッカーを続け、関東大学リーグ1部に出場した。

旧制大学時代の東京帝国大学は関東大学屈指の名門校で、私の入学した昭和27年には旧制最後の3年生と新制最初の4

年生が同時に最高学年に在学した年度で、旧制から新制へまさに切り替わる時であった。新制大学になってからは、旧制高校という選手供給源が無くなり、新制高校からの入学試験が難しくなって、サッカー部の弱体化が進み、毎年1部リーグのビリ争いが続いた。昭和31年私の最終学年、リーグ最下位、入替戦で法政大に敗れ、翌年から2部リーグへ降格となった。

帝人松山の2年間

昭和32年東大工学部機械工学科を卒業して帝人に入社、松山工場に2年間勤務して、帝人松山サッカー部を私が創設し、2年目には国体の愛媛県予選で優勝して四国予選まで進出するなどの経験をした。（帝人社内報「ていじん」昭和33年10月号参照）

帝人松山はその後強化されて、四国一の強豪に成長し、日本リーグ2部に所属していたころは、サッカー仲間に対し私の自慢の種であったが、帝人の業績低下に伴い、活動が衰退している。（サッカーマガジン昭和48年1月号参照）

関東大学リーグ2部の2年間

帝人に2年間勤務した後、将来は化学プラント設計のエンジニアになることを新しい目標に定めて、昭和34年東大工学部化学工学科に学士入学し、再び現役サッカー部員として関東大学2部リーグに2年間出場した。

昭和34年2部リーグで初めて優勝したが、入替戦で法政大にまた敗れ、翌35年は2部4位で終わり、遂に1部復帰の悲願は達成できずに、36年3月卒業した。

千代田化工の現役12年

昭和36年、千代田化工に入社、サッカー部に入って翌37年から3年間主将を務めた。

入社当時の千代田化工は、三菱リーグや顧客会社との定期戦という活動範囲であったが、昭和37年関東実業団リーグに新規加入し、4部、3部と2年連続優勝して、39年2部に昇格し、昭和42年には日本リーグ創設に伴う全国的なリーグ再編成により、東京都社会人リーグ1部に編入され、43年まで2年間所属した。昭和38年には、東京都実業団選手権大会準優勝の成績を残している。

昭和44年、千代田化工本社の鶴見移転に伴って神奈川県社会人リーグに移籍し、2部優勝、45年1部に昇格した。横浜市民大会や鶴見区民大会にも参加した。

昭和48年3月、練習試合で左脚アキレス腱断裂の大怪我、5月に満40才になる直前という時期で、この機会にサッカー部の現役チームから引退した。

シニアサッカーの36年

千代田化工の現役引退後しばらくは、湘南高・東大・千代田化工のOBの行事に参加してほそぼそとサッカーを続け、この時期は主としてテニスに励んでいた。

私の40才代半ばころからシニア年令のサッカーが少しずつ盛んになり、まず昭和53年には、湘南高OBを中核として湘南ペガサスサッカークラブが組織され、創立当初からこれに参加した。湘南ペガサスは、その後、40代、50代、60代、70代それぞれの年代別チームの組織を持つビッグクラブに成長している。

昭和58年、50才になった機会に、神奈川四十雀クラブの50代チームに加入して以来、本格的にシニア年令サッカーに励むようになった。

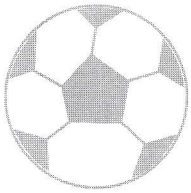
50才代の間は主として神奈川四十雀、60才代以降は主として湘南ペガサスで活動するほか、東大OBチーム、川崎四十雀クラブ、旧制高校OBクラブなどにも参加して、シニア年令のサッカーを続けてきた。

神奈川県のシニアサッカーリーグは、昭和59年に40代12チーム参加の四十雀リーグがスタートし、年々チーム数が増えると共に、50代、60代のリーグも順次編成されて、今年平成21年には70リーグも開始されている。全国的にも40代、50代、60代、70代それぞれ年代別の各種大会が開催されている。

私の場合、神奈川四十雀リーグ発足昭和59年51才、五十雀リーグ発足平成9年64才、六十雀リーグ発足平成17年72才と、どの時代も少し早く年を取りすぎて、いつも若い選手相手に苦戦の連続であった。

昨年75才まで、湘南ペガサス60チームにも参加して六十雀リーグにも出場したほか、4つのクラブに所属して、1泊遠征9回、海外遠征1回など、年間70日もサッカー行事に参加した。

今年は60代チームから引退し、70代チームの各種大会に参加するほか、66才以上、68才以上などの行事に参加して、なんとか80才まで続けることを目標にしている。



湘南サッカーから シニア70のサッカーまで

昭30年卒　中原 弘巳

高校2年の夏、ドイツ、ドルトムンドでの大会に日本学生選抜として参加された、山口、小林、小田島先輩から、お土産として当時としては斬新なデザインのボールを頂いた。日本代表として戦後初のヨーロッパ遠征で、その後の日本サッカー界に大きな影響を与えたそうです。当時高校生の我々も、遠征のお話から世界で広く行われているサッカーの素晴らしさを何となく感じ取っていたと思います。

当時、サッカーを教えて頂ける先生はおられませんでしたが、柳川先輩が毎日来て下さり、合宿時には、上述の3先輩に加えて、早川、海老原、桑田、原田の諸先輩や多くの方々から直々に、ボールの蹴り方から体操や、走り方まで教えて頂いた。さらに3年生になると岩渕先生が湘南に戻られ、直接の指導を受けることが出来た。湘南でサッカーを始めたことで、素晴らしい環境でサッカーを学ぶことが出来、それが今に至るサッカーと離れられない生活に結びついたと思います。

3年時の国体県予選で、事実上の決勝戦である小田原高に1回戦で当たり、延長戦で敗れた。しかし、延長は大会規定に無く、岩渕先生が我々のために、再試合を交渉し下さり、敵地での再試合を行ったものの、この試合にも1対2で敗れ、県代表の壁を破れなかった。東日本大会では3回戦に進んだものの、教育大付属に敗れた。岩渕先生や先輩の方々の指導に応えることが出来ず残念だった。

大学チーム、社会人チームでサッカーを続け、丁度40歳を過ぎた頃、湘南ペガサスが結成され、これに加わることで、その後もサッカーを続けることが出来た。

年の経過とともに、ペガサスの50代チーム、60代チームが編成され、今や70代チームでゲームを楽しむ時代を迎えている。

60歳以上では、旧制名門中学大会等で湘南OBチームが活躍されていたが、2000年からはペガサス60としての活動を始めた。全国大会が2001年から開催され、ペガサス60は2008年まで連続出場している。予選無しの時もあったとは言え、本大会でまずまずの戦績なので、全国レベルの実力を持っている。ここに至って、現役時出来なかった全国大会出場をなし得たことになる。サッカーを続けていたお陰である。

今年（2009年）5月広島市開催の全国シニア（70歳以上）サッカーフェスティバルに、湘南ペガサスとして、昨年の藤枝大会に引き続き参加した。全国から16チームの参加だが、旧制中学、高校OB中心のチームはペガサスのみである。

古くから活動されているシニアチームとしてSOIがある。旧制高校OBチームですが、多くの湘南OBの方々も参加されていました。早くも1980年に湘南OBの常盤さん等4名の方々も加わって、ドイツ他を遠征されており、その後も多くの海外遠征をされています。このSOIに、桑田先輩の紹介で入れて頂き、これまでアメリカ、英国、スウェーデン、オーストラリア、等の遠征に参加しました。

昨年（2008年）、藤沢在住の瀬藤進一大先輩やSOIの小野津さんに後押しされて、個人的にも念願であったドイツ遠征を企画し実現できた。参加15名の内、8名の半数がペガサスからの参加だった。瀬藤さんの紹介で、デュセルドルフ議会チーム、プロOBチームや地元クラブチームと対戦し、交流しながら、サッカーが彼らの生活に密着していることを感じることが出来た。

70歳を超すまで、グラウンド上でサッカーと接し続けるとは、高校のときには思ってもいなかったことですが、これは偏に湘南でサッカーを始めたことによると思います。生涯にわたって、サッカーを続けることが出来る環境を持っているのが湘南サッカーの一つの特徴と思います。現役湘南の活躍とともに、OBになっても生涯現役プレイヤーを続けられる環境作りもまた湘南サッカーの良い伝統として続けて欲しいと思います。

第3回関東大会 準優勝への道のり（昭和35年）

昭36年卒　丸屋 喬

昭和35年（1960年）1月5日岩淵先生・宮原先生に率いられ新体制にて静岡遠征に出発。新キャプテンLI丸屋喬、GK菊岡敬、LB井上孝、RB塩崎洋一郎、LH関紀夫、RH原田冬樹、RI久森茂男、RW渋谷繁夫、以上8名の2年生と3名の1年生が新メンバーであった。静岡工業には勝ったが、静岡高校、浜松西高に敗れ1勝2敗の戦績であった。

2月に入り公式戦の神奈川県下新人大会が始まった。1回戦不戦勝、2回戦6

対0慶応高校、3回戦5対2Y校、4回戦2対0希望が丘、と勝ち上がり決勝戦は小田原高校戦であった。前後半、延長戦とも点が入らないまま再延長戦となり、再延長戦後半久森がシュート、ゴールキーパーがファンブルするところを、渋谷が押し込んで、1対0にて勝利、12年ぶりの神奈川県下優勝となった。久々の優勝に指導者・OBの期待も高く、連日岩渕・宮原両先生と共に厳しい指導を受けることとなった。強化の一環として、春休みに千葉、埼玉に遠征をした。

埼玉では、その年の高校選手権で全国制覇をしている浦和市立高校と雨中で試合し、0対11という歴史的（！）敗戦を喫した。神奈川の優勝高も、全国レヴェルの実力を見せ付けられたが、我々はめげることはなかった。

我々も3年生になり、4月29日恒例の教育大付属高定期戦は湘南高校グラウンドで行われたが、当時は新学期間もないスポーツの試合なので、新入生を始め、多くの在校生が天皇誕生日にも拘わらず、応援してくれた（これは、付属のグラウンドの際も、同じだったように記憶している）。結果は2対3で敗戦。当時の付属は、東京都の代表になるような強豪チームではあったが、今年こそは、と期するものがあっただけに残念な結果であった。続いて、この年から5月開催に変わった対浦和高校定期戦である。浦和も浦和市立と並ぶ屈指の強豪校であり、0対4の敗戦であった。

6月関東大会神奈川県予選は順当に勝ち進んだが、準決勝で栄光学園に惜敗、しかし、3位決定戦で小田原高に勝って、かろうじて神奈川県3校の代表枠には入ることができた。1958年から始まった1都7県の関東高校サッカー選手権の第3回大会（水戸市）は7月27日、猛暑快晴の下で始まった。1回戦は、2対1城北高校（東京）で突破したが、2回戦は浦和高校であった。定期戦4連敗中、しかも前年の本大会では浦和市立とともに両校優勝の強敵に対して、なんと5対1で勝利した。春の定期戦の大敗に雪辱、溜飲を下げた。浦高では、現日本サッカー協会長犬飼基昭氏が同じく3年生HBにて活躍していた。3回戦秩父高校（埼玉）、延長戦に突入、後半丸屋ドリブルシュートにて辛うじて3対2で勝利。4回戦（準決勝）川口高校（埼玉）延長、再延長戦でも0対0のまま、双方点が入らず抽選となり「次回へ進む」を引き当てた。川口高校では後の日本代表ゴールキーパーでメキシコ五輪の銅メダリスト横山謙三氏がゴールを死守しており、道理で点が入らなかった訳である。ついに決勝戦、相手は当時全国一、しかも上述の春遠征で大敗した浦和市立高校である。連日の猛暑・連戦、しかも前々日、前日ともに延長、再延長を戦ってきた我々は体力の消耗も激しく相当へばってはいたが、気力は充実しており、湘南に優勝旗を持ち帰ろうと気合十分で決勝戦に臨んだ。前半16分RI久森からのパスをLI丸屋ゴール横へRW渋谷切れ込んでクリーシュート、先取点をあげた。前半終了30秒前浦和市立にクリーンシュートを決められ同点にて前半終了。後半は湘南陣内で終始試合が進められ数々のピンチを湘南バックスの健闘でゴールを阻んだが、29分ついに決勝点を奪われ1対2で無念の涙をのんだ。決勝までの5試合中、なんと埼玉勢と4試合の結果であった。

準決勝進出の29日、松川校長・村田先生はじめ応援団、3年女子が応援に駆けつけてくれ、大いに気勢が上り、また費用が足りなくなり急遽学校へ電報を打った等、指導者・選手一同うれしい悲鳴を上げた。また9月の授業再開時、全校生徒の前で凱旋報告会をさせて頂いたことも懐かしい思い出となっている。

メンバー全員猛暑の中、真黒になりながら5連戦（まさに、連日）死力を尽くして戦い準優勝で終わったが、青春の一ページの鮮烈な思い出として残る関東大会であった。3年生はこの大会を最後に後進に道を譲り受験勉強に入ったが、当時の2年生メンバーが中心となり翌年（昭和36年）久々に全国大会に神奈川県代表として出場、往年の強い湘南サッカー復活の狼煙を上げることとなったのは、真に嬉しいことであった。

13年振りの「国体！」23年振りの「全国高校選手権」への出場！

昭37年卒　牧村英樹

34年4月入学、早速サッカー部へ入部。3年生が1名、2年生が11名といった小世帯。11人揃わず、石段に向かってボールを蹴る日。その後、同期が続いて入部（小林（弘）、萩野、小林（隆）、宇山、大谷、安河内）。大監督！岩渕先生は「原点重視原則厳守」あくまでもサッカーの基本（トラッピング、サイドキック、インステップキック、ヘッディング）を徹底的に鍛える。体力とキック力を身に付ける為、バックスの選手を中心とした、ハーフラインに立たせての左右50本蹴り。フォワードはペナルティエリアラインあたりに立たせて、左右に走らされてのシュート練習。岩渕先生の顔が鬼に見えたものだった。雨の日、コーナーから蹴るボールのヘッディング練習ではグ

ランドの土に混ざった小砂利が額に食い込む。その後の私のサッカー生活であまりヘッディングをしなくなったのは、この練習のお陰？ではと思ったり・・・。

一方、宮原先生は華麗なるプレー、柔軟なプレースタイルそして豪快なシュートを我々の目の前で見せられ、サッカーの魅力を教わる。

岩渕先生、宮原先生からの指導が終わりかける時間帯を見計らって坂道を登って来る先輩達の姿、『えっ！今日もまた～！。』先輩達は容赦なく疲れきった我々に『うさぎ跳び』を強行。『走って来い！』と言われて、4～5メートル手前からおもいっきり顔面に向けて投げつけてくるヘッディング練習などなど・・・根性論以外の何ものでもない練習。

35年4月に2年生となり、この年の7月に纏まりとバランスのとれた3年生（丸屋、井上、塩崎、菊岡、関、久森、原田、渋谷）が中心となり、2年生の小林（弘）、小林（隆）、牧村が加わってのメンバーで、当時としては大変な快挙とされた関東大会準優勝！！学校を挙げての大騒ぎ！決勝で負けた翌日の地元新聞に『湘南！腰の低いプレーで善戦！』と書かれ喜んで良いのやら・・・？

8月に入りチームの大半を占めていた3年生が引退。キャプテンを仰せつかるも、主力がほとんど抜けた状況での練習試合ではしばらく敗戦が続き、ある日3年生に部室に呼び出しを受ける。私一人部室のコンクリートの床に正座させられ、3年生に囲まれ徹底的にキャプテンとしての責任を追及された事が、その後の発奮につながったのかもしれない。

36年4月3年生になった時、お世話になった宮原先生が転任。鈴木先生が着任される。間もなくして、鈴木先生から職員室に呼び出しを受け『お前がキャプテンか！最近のサッカー部の戦績を言ってみろ！』と言われ、えらくおっかない先生が来たもんだ・・・が第一印象。ちょうどこの時期ドイツからクラマー氏が日本代表の指導に来日し、日本のサッカーが大きな変革期を迎えた時期。

私達湘南のサッカーも鈴木先生の指導により、大きくサッカースタイルが変わり始める。従来のWM方式からの脱皮による流動性のあるポジションチェンジの導入、又、走力強化に向けインタバルダッシュなども数多く導入。

岩渕先生（基本重視）、宮原先生（華麗なサッカー）、先輩達（根性論）、鈴木先生（流動性のあるフォーメーションサッカー）と湘南高校サッカー部の歴史の中でもこれだけのすばらしい指導者にご指導頂けた幸せ者はそうはいないのでは・・・。

8月に入り、同期の3年生が受験勉強を理由に大量に退部。残った3年生は小林（弘）・萩野・牧村と3人になってしまう。改めて2年生・1年生の力を纏めての再スタート。鈴木先生の指導と皆の頑張りにより新生チームながら9月に実施の国体出場権をかけた県予選で勝ち進み決勝で慶応高校に1対0で勝利し優勝！なんと13年ぶり（昭和23年以来）となる国体（秋田）に出場する事となる。

藤沢駅前での壮行会で勇躍現地に乗り込むが、おしくも1回戦（1対2）で鶴岡工業　に敗れる。ようやく県内で優勝し代表となるも、県外相手の試合経験不足が痛感させられた結果となる。それでも、全校生徒による壮行会、現地秋田での町を挙げての歓迎振りは初めてのすばらしい体験であった。余談として、開会式の時、我々サッカーの隣りの列に野球の神奈川代表として法政二高が並んでおり、キャプテンとして最前列にいたのが、その後巨人軍に入団し当時女学生憧れの的で『甲子園の星』と言われた柴田選手。開会式終了後大勢の女学生が花束を持って駆け寄ってきたものの一人として隣にいる私の所には・・・・・・、全て柴田選手目当てであった。残念！まだまだ、サッカーは花形スポーツとは言えず！。

秋田国体から戻ってすぐ、全国高校選手権の県予選に突入。国体出場の勢いに乗って勝ち進み、決勝で常時ライバル的存在であった小田原高校に1対0で勝つ！なんと昭和14年以来（23年ぶり）の全国高校選手権（第40回大会）への出場権の切符を手に入れることが出来た。国立競技場での開催はずっと後の話で、当時は西宮球技場で行われていた。37年1月再び全校生徒による壮行会で激励され、勇んで兵庫県に向かう。試合のほうは、籤運悪く、国体そして結果としてこの全国高校選手権をも優勝し完全制覇した広島県代表の修道高校と1回戦で対戦。力の差ははっきりしており0対5にて完敗。ちなみに、この修道高校は決勝でも3対0で勝利をおさめた。何故こんなに強いのかとの思いと同時に自信を失ってしまった私達であった。最近になって知ったことだが、修道高校は中学からの一貫校で同じメンバーで6年間チームを組んでいたとの事、強くて当たり前と納得！。

試合を終えて、鈴木先生と共に3年生（小林弘、萩野、牧村）だけで訪れた京都での宿泊と、先生と別れた後の3人だけでのいくつかの冒険？は高校生活最後における楽しい思い出となる。1月中旬過ぎまでサッカーで汗をかいた高校生活、受験勉強は出来なかったもののこの青春に悔いは無し！

この様な二大大会に出場する事が出来

たことは、多くの方々のご指導のおかげであり、特に鈴木先生のご指導大なりとこの場を借りして厚く感謝申し上げたい。

「香川家と湘南サッカー」

昭38年卒　香川彰男

父、香川幹一は24年前に他界した。生きていれば、106歳になる。

3人の息子は、いずれも湘南中学、高校で、蹴球部、サッカー部にお世話になった。

長男の嵩（22回生―故人）は、昭和21年11月の第一回国体で全国制覇を成し遂げた時のキャプテン。神戸一中との決勝で、2対2の後、桑田さんが終了1分前に、相手ゴールにねじ込んだのは、子供のころから、耳にタコができるほど、聞かされていた。その時の部長が、父親、幹一であったらしい。

次男の稔（25回生）の時も、23年に第3回国体で、全国準優勝をなしとげ、やはり父親が部長だったようだ。わたくしが生まれたのは、昭和19年。3歳ぐらいの頃と思うが、湘南のグランドから上がる階段のところで、父親に抱かれ、当時の選手と一緒に写した写真があった。

そして、三男の私（38回生）の時、昭和36年に湘南としては3度目の国体（秋田）に出場できた。次男、稔の出場以来、13年ぶりのことになる。こともあろうに、父親は、湘南高校の校長を務めていた。何か因縁めいたものを感ずるが、それだけ多くの人にお世話になり、支えていただいたということであろう。特に、この年、鈴木中先生が、京都の洛北高校から赴任され、技術的に劣るチームのレベルを、戦術面からも鍛えてくれたことが県大会を勝ち抜いた勝因であったと思っている。高校入学後にサッカーを始めた、私を含め、多くの選手が団結して県を勝ち抜けたのは、鈴木中先生のご指導のおかげだった。

全校生徒の前で、国体出場の壮行会があった。当時、校長をしていた父の口から、「個人的な話になるが、」との前置きの後、（「それ来た」と思った）、3人の息子の話を始めたのは、公私混同しているとも思ったが、それだけ珍しい出来事であったのだろう。

わたくしの時は、1年上の牧村主将の元、当時西宮で開かれていた第30回全国大会にも出場することができた。38年にも、姫路国体に出場したが、3年生の多くは、予選を勝ち抜いただけで、本大会へは1、2年生主体のチームで出場した。

当時の3年生は8名、うち本大会には2対3名が出場しただけだった。私は、受験を優先させたが、わずか数週間のことで、そんなに学業成績が上がるわけはなく、いまだに本大会に行かなかったことを後悔している。確か、新聞の下馬評で、湘南はベスト8に入っていたような記憶があるが、選手が抜けてしまったのでは、どうにもならない。お世話になった先生・先輩・チームメート・応援してくれた方々には、申し訳ない気持ちをいまでも持っている。

残念なのは、全国レベルの大会に出ると、いずれも1回戦で敗退してしまったことである。昭和20年代前半のように、ひもじい思いもしなければ、ある程度の練習道具も揃っていたが、その分ハングリー精神がかけていたように思う。かすかな記憶であるが、昭和20年代の兄の頃には、確か、小田島先輩（25回生）がチームメートのスパイクを修理しており、時々、我が家にも修理したスパイクを持って現れたのを思い出す。当時のスパイクは、皮を釘で打ちつけて作っており、使用中に釘が中から出て足に刺さるという状態だったらしい。

37年の秋田国体は、山形の鶴岡工業との1回戦、延長で競り負け1対2で、敗退してしまった。試合が終わって、幌つきの自衛隊のトラックに乗せられて宿舎への帰りの辛かったことは、今も思い出す。秋田へは、神奈川選手団の夜行列車、西宮（大阪）へは、藤沢駅から鈍行で、一晩かけて出かけた。しかし、1回戦敗退の言いわけにはなるまい。

初代、赤城校長先生は、サッカーを、湘南の「校技」とした。私は、今でもそう思っている。現在のサッカーのレベルは、当時とは比較にならないほど高度の技術が要求され、県のレベルでも勝ち抜くのは至難の業のようだ。しかし、現役諸君に期待するところは大きい。毎年のOB会費も、いつかは湘南サッカーの活字を全国紙で目にする日が来ることを願いつつお支払している。

現役諸君の活躍を祈念しているのは、私だけではないだろう。

慶應大学サッカー部 総監督に就いて

昭41年卒　福井民雄

一昨年（２００７年）から慶応大学サッカー部の総監督を務めている。大学卒業後37年経ち還暦を迎える歳にもなって、現場の一員となり現役学生選手と苦楽を共にするとは夢にも思っていなかった。就任要請を受けた時には何度も断ったが断りきれず引き受けることになった。

慶應大学サッカー部（正式名称は「慶應義塾体育会ソッカー部」）は天皇杯９回優勝、関東大学リーグ７回優勝、全日本大学選手権（インカレ）３回優勝、などの輝かしい栄光の歴史があるが、それもいにしえの物語になってしまった。40年前私が大学４年生時のインカレ優勝が最後で、その後は長い低迷の時代が続き、関東大学リーグの１部と２部を行ったり来たりし、一時期は東京都リーグにまで陥落したこともあった。

慶應大学は運動部に対する特別な援助はなく苦戦を強いられてきたが、２００２年創部75周年を機にＯＢ会の全面的な支援により、専任指導者の配置、グラウンドの夜間照明および人工芝敷設が実現した。

また、スポーツ推薦入学制度はないが、サッカーレベルが高い文武両道の高校生選手に対するスカウト活動（ＡＯ受験、指定校推薦入学）が奏功し、優秀な選手の入部が増えてきた。

２００８年関東大学２部リーグにおいて圧倒的な強さで優勝を飾り７年ぶりの１部復帰を果たすことができた。

そして、２００９年１部リーグにおいて上位チームと互角の戦いができるほどに実力がつき、12チーム中４位で前期を折り返し、予想以上に健闘している。

関東大学リーグおよびインカレの優勝を目指して戦っているが、もしそれが実現すれば、それぞれ57年ぶりと40年ぶりの快挙となる。この文章が掲載される頃には結果が出ている。

慶應大学サッカー部には湘南高校ＯＢが多数入部し活躍してきた。出身高校別人数では慶應付属高校を除くと湘南ＯＢの20名が最多だが、近年は少なくなってしまったのがさびしい。何か理由があると思うが、是非昔のように湘南高校から続けて慶應大学サッカー部でサッカーをする選手が増えてほしい。

湘南から慶應サッカー部へ入部した歴代選手は以下の諸氏。

【敬称略】駒崎（８回）、田村（15回）、小西（20回）、宮沢（22回）、松岡（23回）、小林忠生（23回）、佐々木（26回）、酒井佐弘（26回）、酒井佐康（31回）、奥村（40回）、杉本（41回）、福井（41回）、関口（42回）、猿渡（43回）、中野（44回）、八木（52回）、田村（64回）、善木（64回）、佐藤（72回）、および現役学生の渋谷（82回、36回生渋谷氏のご子息）。

鹿島アントラーズ 立ち上げに関わって（湘南サッカーに感謝）

昭42年卒　関口　真

私が「サッカー」というスポーツ（遊び）を知ったのは中学の部活である。昼休みも練習後もボールを蹴って遊ぶことに夢中になり、３年の時には神奈川県大会に優勝、徐々にサッカーとの関わりが深くなってゆく。

幸い湘南高校に入学出来、サッカー部に入部、中先生と出会うこととなる。サッカーもスポーツとして、勝つことを目的に練習も厳しくなり、求められるものも徐々にハードルが高くなる。サッカーは好きであったが、なかなかついていけない自分があり、特に１年の時は消極的であった。ただ、湘南の伝統的なサッカーは徐々に体に滲みついて行った様だ。

先生の教えるパス＆ゴー、攻守の切替、ポジショニングとチームワークはサッカーの面白さの原点として、私の柱となって行く。また、その教えは湘南サッカーの歴史と融合し、現在も伝統として、そのチームワークに関わった多くの人々に支えられ流れているものを感じる。戦績も、常に、恵まれた同僚、先輩、後輩に囲まれ、先生の変則フォーメーション（当時）による最小失点で関東大会に優勝、全国大会にも出場と湘南サッカー部の歴史の中でも特筆される一角に在席できたことは幸いであった。

その後もサッカーを続け、慶応では全日本級の先輩、後輩に恵まれ、３年の時に全日本大学選手権に優勝、卒業後は中先生の教え子が監督であった住友金属工業蹴球団（以下住金、現Ｊリーグ　鹿島アントラーズ）にお世話になり、大阪府リーグ、関西リーグを経て全国社会人大会に優勝し、Ｓ49年には日本サッカーリーグ２部に昇格するなど、結果は恵まれていた。ただ、その後のサッカーとの関わりは、これだけサッカーにお世話になっておりながら、ボールを蹴り続ける遊びの世界に終始している。

１９９３年５月16日Ｊリーグ開幕

戦。その時私は鹿島アントラーズのホーム、カシマスタジアムにいた。1991年2月14日、Jリーグ参加は99.9999%不可能といわれた2部リーグの住金がJリーグ発足時からの参戦が認められ、急遽、事業立ち上げのプロジェクトチーム（茨城県鹿島）に参加することとなったからだ。それから、約18年、いま鹿島アントラーズはJリーグ初の3連覇を目指して突き進んでいる。立ち上げ当初の環境からは想像しがたい喜ばしい状況である。

鹿島臨海工業地帯の地域の街づくりから始まったこのプロジェクトは、当初、住金並びに県、町がやっているとの感覚で人々の理解はまだ得られてはいなかった。各種団体へのPRを始め、チーム名の公募、ファンクラブ募集、クラブハウス建設、サッカースクール開校、競技場運営etc目の前の課題を関係各スタッフが精力的に周囲を巻き込みながら実際の形に作って行く。その中で、ボランティアによる競技場運営など住民参加型のものも出来るようになり、徐々に町全体が動き出すようになる。

関係者の強い意志と努力は勿論、折からのJリーグブームにも助けられたが、元ブラジル代表のジーコ（愛称）の存在が極めて大きな影響を及ぼした。選手への生活指導から始まるプロ意識の徹底、勝負への執着の意識は徐々に浸透し形となって行く。その基本は今も息づいているが、彼は来日後2部リーグから既に行動を起こし、単なる選手ではなく、このプロジェクトの牽引者としての関わりを十二分に理解し、自分の経験をチームに還元して行った。

92年Jリーグ前哨戦のナビスコカップが始まり、ベスト4の結果と共に周囲の雰囲気もどんどん変化していった。そして93年の開幕戦。元イングランド代表リネカー擁する名古屋グランパスにジーコのハットトリックによる劇的な圧勝、ならびにスタジアムの怒涛のような歓声、地響きは、今も脳裏に焼きついている。

いつのまにか暴走族はいなくなり、鹿島は全国区となり、住んでいる人々が自信を持って自分たちの町を誇りに思うようになるベースが出来つつあることを実感した。Jリーグ構想の実現チーム第一号？である。この時ほどサッカーというスポーツの持つ潜在能力のすごさと、私がその事業の一部に携わることが出来たことを幸せに思ったことはない。

その土台を作っていただいた湘南サッカー部＝OB会に感謝を申し上げるとともに、関西より蹴球祭に向けて里帰りし、ボールを蹴り続けることを楽しみにしている。

湘南高校サッカー部と私

初代女史マネージャー
昭44年卒　小泉治子

マネージャーとして女子初だったということから、今回何か書けというお話になりました。湘南高校のサッカー部に在籍したのは、もう40数年も前のことですので、記憶も定かではなく、はたして思い出したことが実際にあったことか、勘違いかわかりませんが、つらつらと想い出を綴ってみます。

私は3人兄弟の末っ子で、高校までは兄達の背中を追うように過ごしてきました。学校を選ぶのもさして考えもなく兄達が行った学校に進み、中学では兄達がテニス部に入れば自分もテニスをやってきました。高校も同じ学校に進みましたが、さてサッカー部となると男子しかやっていません。その頃女子がサッカーをプレーすることはなかったので、選手になろうという気はありませんでした。すでに兄達は卒業していますし、さてどうするか。とりあえず、中学でやっていたテニス部に入りました。しかし、兄達からの影響でしょうか。サッカーこそ世界で一番人気のあるスポーツなのだから、やるならサッカーしかないと思い込んでいたようです。なんとかサッカー部に入れないかと単純に、しかし熱心に考えておりました。そのころから学校スポーツでぽつぽつ出始めた男子運動部の中の女子マネージャーに眼をつけましたが、どのように行動して良いかわからず、クラスの中で、サッカー部のマネージャーになりたいと吹聴していたようです。クラスにもサッカー部の部員が何人かおりましたが、自分から頼むような行動力はありませんでした、夏休みが終わった頃だと思いますが、同じクラスのサッカー部員から、マネージャーが足りないからやらないかと声が掛かりました。ラッキー！！　一も二もなく引き受けました。越川君、声を掛けてくれてありがとう。40数年たってのお礼です。

さて、念願のマネージャーになりました。上級生のマネージャーから指導をうけたのですが、何しろマネージャーになっただけで舞い上がっていますから、何をどうするかなどわかりません。選手の練習を見ることが、堂々とできるというだけで、部室の前に立っている毎日でした。それでも幸せを感じていましたから、今考えると15、16歳の頃はなんと子供だったのか。

さてさて、毎日部室の前で選手の練習を見ているだけでは能がない、と思ったかどうかは忘れましたが、とりあえず練習ノートは付けていたようです。それからは雑務一辺倒、部室の掃除、ボールの紐の調達（その頃のボールは紐で編んでいたのですねー）、汚いユニフォームを持ち帰って洗濯、試合の時のレモンの準備、などなどです。部長の鈴木中先生の怒鳴り声も結構心地よく響いていたような。まあ選手に対する罵声なので、他人事だったのでしょうね。その中さんからやらされた仕事が高体連の手伝いでした。大会があるたびに各高校に案内を出しますが、ワープロもパソコンもない時代、封筒の宛名書き、郵便局からの発送は私の仕事になりました。何回かやっているうちに中さんに褒められたことは、『宛名書きがうまくなったな』という一言でした。残念ながら本当はうまくなっていないのですが、中さん一流の人使いのうまさ（？）だったのでしょうか。まあ、こんなことで私のマネージャー時代は流れていきました。さして疑問も持たずに毎日を過ごしておりましたが、選手が思うように成績を残せない時は大変悔しい思いをしました。その時は私もサッカー部員だという意識があったようですね。

卒業の時に残した自分の一言だけは覚えております。『試合に出ている選手は自分だけで試合をやっていると思わないで欲しい。補欠の選手もマネージャーも皆で戦っているので、試合に出ている選手はその代表なのだから。』このような発言をしたのは、自分でもプレーしたいというもどかしさもあったのだと、今は思います。その後就職してからは硬式草テニス一筋に四半世紀も続けております。

サッカー部に置いてもらって良かったことは、今でもその時代のチームメートとの交流が持てていることです。20代は皆職場で忙しくしていましたが、卒業して18年後の30代後半から我々の代は毎年晦日に集まって思い出話に花を咲かせています。その中に有難いことに私も呼んでもらい、ほぼ毎年参加しています。今ではサッカー部だけではなく、他の運動部を含め同年代の連中に声を掛けて集まってもらっています。中さんにも何度か出席してもらいました。我々の高校時代に中さんはまだ30代前半だったはずですが、なんと偉そうでなんと怖そうだったことか。選手の諸君は大変だったでしょうね。そのような話も晦日の集まり（晦日会と名前が付いています）で毎度のように出ます。その中さんも年を取ったはずですが、何時会っても（大病をされたにも関わらず）お元気で、高校時代を思い出します。たった3年足らずの高校生活が、そしてサッカー部によって繋がった縁が半世紀にもなろうとする今に繋がっているなんて、本当に素晴しいことですね。今回の還暦の方々のお祝いには伺えませんが、来年は我々が還暦です。盛大に祝いましょう。

23年振りの選手権出場

平2年卒　結城亮太

このたび第67回全国高校サッカー選手権大会（一九八九年）出場時の主将ということでご指名を受け、筆をとらしていただいた。ご承知のとおり湘南サッカー部では伝統的に高校総体終了時に代替わりをするため、選手権出場時には2年生（65回生）だった私が主将を務めたが、このチームには浪人覚悟で選手権を目指した8人の3年生（64回生）が残っており、実質的には前主将の若木均さんのリーダーシップの下で選手権出場を果たしたチームである。

あれから20年経過したが選手権にまつわる思い出として私が忘れられないのは、夏休み恒例の40分間走だ。これは鵠南小学校近くの砂浜を40分間ひたすら走るというものである。県予選前も行われた。ある日、前方を走る3年生の様子がおかしい、と感じたら目の前で倒れた。炎天下を走ったため熱射病になったのだろう。救急車が到着するまでの間、うわごとのように「全国に行くぞ」「国立にいくぞ」と繰り返し口にされていた。倒れてもなお選手権のことを口にする先輩の姿に選手権にかける強い思いを痛感した。

試合内容についても、今回あらためて過去の記事を読み返してみると，鮮やかに記憶が蘇ってきた。

県予選準々決勝の藤沢西戦。一番のヤマだった。藤沢西は後年湘南で指揮をとられた清水監督が率いるチームで、国体代表選手5人を擁し、優勝候補の呼び声が高かった。試合はほぼ支配されたが、山口尚己さんのCKを若木さんが頭ではなく右足で決め、この1点を守り切った。藤沢西には春の関東大会の県予選決勝で0対4で大敗していただけに、この勝利によって一気に勢いがついた。

準決勝の鎌倉戦。3対0で快勝した。この試合ではCFの木村義幸さんが大活躍した。ジャンピングボレーとオーバーヘッドで2得点を挙げた。体をひねりながら打つ木村さんのシュートは、DFの私が後ろから見ていると、どこに飛んで行くのが全く予測できない。

決勝の県立相模原戦。2対1で辛勝した。前半に田村直也さんのセンタリングを木村さんが2試合連続でボレーシュートを決めた。後半には相手のクリアを拾った田村さんが落ち着いて決めた。その後1点を返され猛攻を受けたが、どうにか逃げ切り、23年ぶり6度目の全国大会出場を果たすことができた。

選手権1回戦の上牧（奈良県代表）戦は、冷や汗ものだった。試合を支配しながらも、前半を無得点で折り返した。後半10分、田村さんがドリブルで中央を突破して、待望の先制点を挙げた。その後も再三攻め続けたが、逆にロスタイムに私がペナルティエリア内でハンドを取られてしまった。PKを決められ、試合は1対1で終了し、PK戦で7対6で辛くも勝った。この試合はTVKで生中継されていたが、後日、ビデオを見たところ、ロスタイムにPKを決められた際、解説のセルジオ越後が「ドラマですねー、ドラマですねー」と連呼していたのが耳障りだった。

2回戦の愛知（愛知県代表）戦は、セットプレーからの2得点で快勝した。愛知には後に日本代表のDFとして活躍した秋田豊がいた。1点目は前半13分、山口さんの左CKを若木さんが秋田と競り合いこぼれたところ、小林卓麻さんがダイレクトであざやかに蹴り込んだ。2点目は、後半17分、若木さんの左サイドからのロングスローを受けた石井が相手DFを振り切りって決めた。

3回戦の盛岡商業（岩手県代表）戦は、一方的に攻められた記憶しかない。強風に見舞われた中での試合で、前半は風上であったが2失点した。後半終了間際にはダメ押しの3点目を失った。終盤には、左SBの若木さんが積極的に攻め上がり、シュートまで持ち込んだが、得点には至らなかった。後日、3回戦のビデオを見ていたら、解説者が「湘南もこのように攻めることができるのに、守りに入ってしまったのが敗因だ」という趣旨のことを言っていたいが、今となっては残念でならない。

他にも選手権に出場した3年生（64回生）には，おいどんチョップで相手FWを次々をなぎ倒していくストッパーの及川憲之さん、冷静沈着で後方から的確な指示を出すスイパーの善木茂雄さん、ベンチから人一倍大きな声で声援をくれる永井潤一さんといった頼りになる人たちが揃っていた。

このように選手権出場及びベスト16という結果は、8人の3年生の力によるところが大きいが、関東大学リーグを見に行っては各大学の応援をパクり、湘南独特の応援に仕立て上げ、選手権本大会で実演してくれた控えの2年生（65回生）及び1年生（66回生）、受験直前であるにもかかわらず応援に駆けつけてくれた引退した3年生、縁の下でチームを支え続けてくれたマネージャー等が一丸となって勝ち取ったものだと思っている。

最後に、選手権出場監督中最年少の28歳でチームを率いて下さった藤塚久雄先生、当時ですでに30年以上もの長い間湘南サッカー部を支えてこられた鈴木中先生に感謝しつつ、筆を置かせていただく。

「全力で取り組むということ」

平2年卒　平田緩和

高校卒業から20年近く経ち、諸先輩方にはまだまだと言われるかもしれませんが、湘南のグランドでボールを追い回したのが、だいぶ昔の思い出として懐かしく思われる今日この頃であります。現在、私は中村俊輔を輩出した桐光学園で教壇に立ち、「FC川崎栗の木」というクラブチームの監督という形で、幸せにもサッカーに関わり仕事をしております。（チームは桐光学園の生徒を中心として設立されたクラブチームで、神奈川県U-18リーグでは湘南サッカー部が今年度所属するK2リーグで来期はプレーをします）

みなさんもご承知の通り、この20年日本のサッカーを取り巻く環境は劇的に変化しました。私も10年ほど前、指導者の立場になった時、技術的・戦術的に浦島太郎のようで戸惑った記憶があります。また、ボールなど用具の質・グランドの状態・メディアでの扱いなど、自分の高校時代とは雲泥の差があり、今の子ども達はなんて恵まれているのであろうと羨ましく思います。

しかし、いつの時代になっても変わらないもの（変わって欲しくないもの）が、私にはあります。それは湘南サッカー部で培われたものであると自負しています。それは「何事にも全力で取り組むこと（取り組もうとすること）」です。これを完璧にこなせる人間は居ないでしょう。よく、後悔しないように…というフレーズを聞きますが、後悔の全く無い人間なんて居ない訳で、人間様々な後悔を背負って生きています。自分には高校サッカーをしていた時のことで未だに後悔していることがいくつかあります。その一つは、夏の早朝に3日間行われる辻堂海岸の40分間走のトレーニングのことです。初日・2日目は全力を尽くし、全体の10位以内に入りました。しかし、最終日は選手権大会に向けてチームに残った

3年生も参加し、自分は10位以内には入れないであろうと、手を抜いて走ってしまいました。その時、全力を尽くした3年生のY先輩が倒れて、意識朦朧の中「国立でサッカーをしたいんだ」と言っているのを聞き、自分が恥ずかしくなったことを今でも覚えていて後悔しています。（ご存知だとは思いますが、その年湘南高校サッカー部は23年ぶりの選手権出場を果たしました）それでもその後、弱い自分に負けそうになることは多々あり、それを叱咤激励してくれた友人・藤塚先生には感謝しています。

自分は今、指導者という立場にいて、全力を尽くさなかったことに対する後悔を少しでも減らせるよう、弱い自分に打ち克てるようになって欲しいということ、負けそうな仲間を叱咤激励できる素晴らしい関係を築いてくれることをサッカーというスポーツを通して、子ども達に伝えたいと思っています。

最後に湘南高校サッカー部には今も全力を出し切る、仲間を叱咤激励できる、そのような素晴らしい雰囲気があると思います。これだけサッカーが盛んになり、強豪私立や一部公立高校に選手が片寄る時代（選手が集められること自体はサッカーのレベルアップのために悪いとは思いませんが）に選手権二次予選に進出できる湘南高校サッカー部を誇りに思います。自分もその誇りを胸に指導者として邁進できればと思います。

キャプテンとして

平4年卒　中園真介

僕たちももう35歳のオッサンになってしまいましたが、憧れの湘南高校に入学し、憧れの湘南高校サッカー部に入った時のことは今でも鮮明に覚えています。ちょうど高校入試の時、湘南高校サッカー部は全国高校サッカー選手権に出場し、勉強の合間にテレビで見ていた先輩たちが同じグラウンドにいた時の感動は忘れられません。当時は選手権メンバーを中心にやたらと体の大きい人が多く（僕も入学時180cm弱あったので大きいほうでしたが）ものすごい威圧感がありました。はっきり言って怖かったです。

サッカーはディフェンス力が非常に高く、守り勝ってサイドからの速攻というパターンが多かったように記憶します。僕たちもその伝統を引き継ぎ守り勝つサッカーをしたかったのですが、最後まで先輩たちのような威圧感を出すことは出来ませんでした。でも卒業してからもう17年以上経ちますが、選手権に出場した話は聞きませんし、やっぱりすごい人達だったんだなぁと今更ながら思います。

今、湘南高校サッカー部で過ごした3年間を振り返ると本当によく笑い、よく泣き、よく怒っていたなぁ、と思います。

僕の人生であれだけ喜怒哀楽が激しかった時期は他にありません。何に対し笑い、泣き、怒っていたか思い出すことは出来ませんが、多分ものすごくどうでもいいことにその都度熱くなっていたように思います。練習中も常に真剣勝負で怒鳴り合っていました。毎日ヘトヘトになるまで走り続け、走るのを止めると怒鳴り、怒鳴られていました。今思うとものすごくストイックな世界でした。

高校生活のほとんどはサッカーが中心で、毎朝7時頃からグラウンドで走り、朝のホームルーム前には持ってきた弁当を食べ終え、授業中は体育以外ほとんど眠り、昼休みになると学食で昼飯を食べるとすぐにグラウンドへ行き、夕方は3時頃から暗くなるまでずっとグラウンドにいたように記憶します。全体の練習が終わっても各自自主練をしたり、部室でしゃべったり、と何だかんだと学校に残っていました。それだけサッカーをしていればもう少し上手になっていてもおかしくないのですが、（当時はうまくなったと思っていたのですが）体力ばっかりついて人に見せられるような技を繰り出すことも出来ないまま卒業してしまいました。でも、サッカーの基本である走る・蹴る・止めるという部分はその後色んなところでサッカーをしましたが人並み以上に身に付いていました。

僕らのチームは結局、インターハイ予選では旭高校に負け、選手権予選では桐蔭学園に負け、ベスト16入りも果たせず引退してしまいました。対戦した旭高校も桐蔭学園もJリーグに入った選手が何人もいるようなチームで負けてしまったのは今となっては当たり前のことだったと思いますが、それでもまだあの時のシュートが入っていればとかあの時パスをせずにドリブルをしていればとか色々思い出しては悔しい思いをしています。やっぱり人生をやり直せるなら湘南高校のサッカー部をもう一度やり直し、今度こそ選手権に行きたいと思います。

月並みですが、湘南高校サッカー部が現在でも僕たちの人生の礎になっていることは間違いありません。サッカー選手としては誰も大成できませんでしたが、この先驚くような活躍をする仲間が出てくるだろうと他力本願に考えています。これからも湘南高校サッカー部が永遠に活躍し続け、たくさんの素晴らしい人間を輩出し続けることを心より祈っております。最後になりますが、創立90周年お

めでとうございます。歴史の一部に加わることが出来て本当に良かったと思います。

現役時代の思い出（71期主将として）

平8年卒　阿見　潔

1995年の関東大会県予選が私自身の現役時代の最も印象的な思い出です。1回戦の逗葉高校戦を2対0、2回戦の弥栄西高校戦を同じく2対0と、厳しいと思われた組合せを無事に勝ち抜き3回戦を迎えました。3回戦の東高校戦は、開始間もなく失点をすると立て続けに失点を重ね、前半開始20分位までに3点のビハインドを負いました。力の差を見せ付けられた苦しい立ち上がりでしたが、誰1人諦める事なく、粘り強く戦い続けました。そして、1点ずつ地道に積み重ね、後半になってようやく同点に追い付く事ができました。ところが、ここからというところで痛恨の失点。これまでかとも思われましたが、最後の最後で同点に追い付き、なんとかPK戦に持ち込み、息を呑む展開の末に勝利を掴み取りました。私は試合直後の雰囲気を今でも忘れません。湘南高校のサッカー部員として過ごした時間の中で、これほどまでの一体感を感じた事はそれまでなかったからです。試合に出場していた選手だけでなく、日々練習を共にしてきた部員全員の思いが一つとなって掴み取った渾身の勝利でした。みんなで喜びを分かち合えた瞬間でした。

当時は新入生を迎える前で、2学年併せて60人程度の部員が居ました。その頃は、私自身がチームの勝利という結果を何より優先して考えていました。今考えれば良い事ではないのですが、練習ではトップチームのメンバーをほぼ固定し、連携を高める事に重点を置いていました。決して技術が高いと言えるチームではありませんでしたし、トップチーム以外でも実力のある選手は居ました。もっとメンバーを入れ替えながら競争意識を持ち合う中でレベルアップを図るべきだったのでしょう。しかし、当時の未熟な私はそういう考えに至りませんでした。もちろん最終的な試合のメンバーは監督が決めますが、その事については今でも後悔の念を抱く事があり、みんなに申し訳ない気持ちになります。トップチームに入れない選手からは、紅白戦でトップチームを倒すという気迫を感じていました。チーム一丸となって同じ方向を向いて戦うモチベーションを私が奪っていたかも知れないという思いがあるだけに、東高校戦後の強い一体感から得られたあの感動が、今となってより一層大きなものに感じられます。

3回戦に続く準々決勝では、横浜隼人高校に1対1からの延長戦で3対2で勝利し、ベスト4に進出しました。大会を通じて、粘り強く戦える様になり、チームが強い絆で結ばれた事でチームは大きく成長した気がします。準決勝の相手は桐光学園。現日本代表の中村俊輔選手をはじめ、今でもJリーグで活躍する選手が多い強豪校でした。私が2枚目のイエローカードを貰い退場するまでは0対0でしたが、結局0対2で敗れて関東大会は終わりました。あと一勝で県代表という大事な試合で、みんなの思いを台無しにした自分の愚かさが本当に悔やまれます。

高校生活という短い時間がいかに貴重であるかは、引退してから実感すると思います。取り戻したくても取り戻せない時間です。学業と両立しながらサッカーに打ち込んだ時間は私自身にとって大きな財産です。ところで、現役生の皆さんはサッカーを楽しんでいますか？私自身は正直なところ、心から楽しめていたとは言えません。毎日サッカーをする事が当たり前になっていて、そこに喜びを感じられなくなっていました。年月を重ね、サッカーから少し離れた時に、改めて自分にとって、サッカーが大きな存在である事に気付きました。辛い練習に耐える現役生の皆さんには簡単な事ではないのかも知れませんが、常にサッカーをできる喜びを感じて、プレーを楽しんで欲しいと思っています。

私がサッカー部員として過ごした3年間は新校舎の工事中で、グラウンドには仮設のプレハブ校舎があり、湘南高校のグラウンドで試合はおろか、練習すらした事がありません。放課後は、大清水高校の隣のグラウンドや秋葉台球技場といった施設に移動して練習をしていました。私達が常に練習できる環境を確保するために尽力下さった当時監督の藤塚先生への感謝の気持ちは尽きません。また、練習や大会を見に来て下さったOBの先輩方、とても心強かったです。ありがとうございました。私は就職を機に神奈川を離れており、現役生の試合の応援に駆けつける事がなかなかできませんが、常に母校の奮闘を祈念しております。どんな結果であれ、現役生の皆さんの存在は私達OBの誇りであり、希望の光です。これからも頑張って下さい。

「現役時代を振り返って」

平11年卒　森下　誠

現役時代の3年間は、人生の中でも特にサッカーを楽しんでプレーすることができ、充実した3年間でした。今思うと、湘南高校サッカー部に情熱を注いできた先輩方の想いが、積み重なりサッカー部の歴史と伝統が作られてきたのだと実感します。ただ、現役当時の私は漠然としか感じることができていませんでした。この熱い情熱に対して情熱現役時代に私が伝えることができなかった「感謝」の気持ちを伝えることができたらと思います。

私が入学した当時、高校サッカーの世界では公立の活躍はあまり耳にしていませんでした。サッカー部に入部して先輩方やOBの方々の話を聞き、湘南高校サッカー部の歴史や伝統を徐々に感じるようになりました。初めて練習試合に出してもらったときは右のサイドバックで、自分のプレーだけで精一杯だったことを思い出します。1年生の夏、高校サッカーのレベルについていこうと必死だった私に、合宿中「森下！森下！」と大声で指導して下さった鈴木中先生の声は今でも忘れることはできません。そして、この夏の選手権の予選、対清水ヶ丘戦のグランドの上で6番目のPKキッカーだった自分に出番がまわってくることなく敗戦したとき、先輩の悔し涙とともに先輩の情熱と高校サッカーというものをはっきりと肌で実感し、先輩達から受け継いでいくものだと感じました。

2年生の時には、清水先生が赴任され、指導を受けるようになり改めて高校サッカーにおいて基本である、〈走る、止める、蹴る〉の重要性を思い知らされ、体力と基本技術の向上や体調管理、高校サッカーに必要な多くのことを指導していただき、チーム作りは進んでいきました。当時の先輩の言葉で、とても印象に残る言葉があります。「謝らなくていい、まだ終わってない。」総体の予選の湘南工科戦で、雨の降る中DFラインの裏に出たボールを、最終ラインにいた私が相手FWと競り合いスライディングをした際に、ゴールに近いところでFKを与えてしまったときの言葉で、その言葉で私は上を向くことができその後も、弱気になることなく積極的にプレーすることができました。また、先輩のあきらめない強い意志を実感する言葉でした。この試合はPK戦までもつれ敗れましたが今でも思い出す一戦となっています。

私達の代では、先輩方の代やOBの方々のような成績を上げることはできませんでしたが、穂坂、石渡二人の副キャプテンをはじめ部員、マネージャー、清水先生、須藤コーチそして湘南高校サッカー部に情熱を注いで下さるOBの方々の支えもあり伝統ある歴史の一代を全うすることができました。自分は怪我に苦しめられ最後は満足にプレーすることができませんでしたが、高校サッカーを思い切り楽しませていただいたと思います。そんな自分を指導していただいた鈴木中先生、清水先生、須藤コーチ、支えてくれた部員、マネージャー、後輩達、高校サッカーに対する情熱を教えてくださった先輩方、そして現役の部員がサッカーを思い切りできる環境を整えてくださり、見守り、熱い情熱を受け継いできたOBの皆様方に現役時代に言葉にして伝えられなかった感謝のことばを贈ります。

「ありがとうございました」

自分達の後輩も、私が感じた先輩達の情熱を私達から受け継ぐことを願っています。

「レジリアンス　～ボールと私と～」

平15年卒　黒鳥偉作

「輝かしい青春」とはとても言えない泥臭く未熟で屈辱の三年間、私達78期生は当時の総監督であった清水好郎先生に徹底的なご指導を頂いた。清水先生こそ湘南高校サッカー部そのものであり、清水先生なくして私達の世代を語ることは不可能である。

サッカー部への入部は新入部員の自己否定から始まった。私達は今までの経験全てを否定され、ボールを蹴ることと走ることのみを要求された。つまり、その能力のない者は容赦なくグランドの外に出された。「人生は理不尽である」初めに肉体に叩き込まれた言葉であった。脱落者は皆、修行僧のごとく日々坦々と山へ向かった。

まず頭で考えることを否定された。全ての動作を身体で反応するように訓練された。高尚な思考や独創性はむしろ邪念であった。身体的に誤った動きは「マスターベーション」や「コカ・コーラプレーヤー」などと酷評され、その度に修正

された。何が間違っているのか、どうすれば正しいのか。全員が毎日を食らいついていくだけで精一杯だった。複雑な動作は一つもなかった。全て単純な動作を行うことだけ求められた。しかし、一振りのインサイドキック、正確なヘディング練習、105 mを走り抜くことが如何に難しいことか。前を走る先輩方の前に足を一歩踏み出すことすらできなかった。自尊心は悉く傷つけられたが、やり場のない悔しさを身体的に表現することすら及ばなかった。

何千、何万回という絶え間ない反復練習を続けるうちに、いつの間にか型ができ、サッカーの「匂い」が現れた。単純な基礎練習の末に飛躍があることを私達は知った。競争できる体力と技術を得た同期の中からトップチームの公式戦に出る仲間がいた。グランドでは勝つことだけを求められた。練習でできないことは何一つ試合で生かすことはできなかった。同時に、数々の強豪との争いの中で私達は勝つためにしぶとく耐えることも身につけていった。戦略として勝つために負けないことを考え、どんな相手であってもチームとして一貫した戦術を持ち続けた。また、弱さの内にあっても常に前を向くことに私達はこだわり続けた。一所懸命も一生懸命には及ばず、「人生はこれからも続いていく」からであった。

最も人間的に傷つきやすく、自己否定の衝撃波を避ける術さえ知らないが、かといって受け止めるほどの力もない純粋な十代後半の時期を私達はサッカーに捧げた。湘南高校という幻想に在籍する証を得られた実感は何一つないが、その犠牲によって全人格的な動揺を私達は経験した。それが結果として「逃避」や「挫折」の選択につながったかもしれない。ありとあらゆるものは否定された。しかしながら、否という自分自身の声の中に答えがあることも私達は気づいていた。それぞれにはふさわしい時がある。「文武両道」と簡単には言うが、その領域に格好良さを求めることは間違いである。伝統という言葉が何を表すのか。アイデンティティ確立のための外的権威であれば、それは拠り所とならない虚構であり破壊しなければならない。伝統ありきではなく、本質があってこそ伝えることに意義が立つ。

現在、私は僻地を担う医師としてスタートを切った。必要なのは小手先の技術や知識ではなく、体力と気力を土台とした大きな知恵である。さらに私のフィールドは進み、日本における医学・看護とキリスト教神学の融合へとつながっていく。モチベーションは当時と変わらない。困難と迷いの中にあるとき、いつも清水先生の怒声がある。「走れ！」と。既に、私は一歩を踏み出しているのだ。

現役時代の思い出

平17年卒　浅野雅人

湘南高校を卒業して四年半、湘南高校サッカー部を引退して五年もの歳月が経った。サッカーのことばかりを考え続けたあの二年半の日々。ついこの間のことの様だと感じるよりは、懐かしく感じることの方が多くなってきた。

私が特筆しなければならない現役時代の思い出と言えば、サッカー部初の海外遠征となったスペイン遠征だろう。この遠征の実現に当たっては様々な問題が存在した。私の一つ上の先輩方は、国際情勢の影響でこの遠征を中止せざるを得ない状況であったし、手探りのことが多く、全ての問題をクリアするのは無理かと思われた。しかし、私達の「行きたい」という想いに、清水先生を始め、OBや保護者の方々が応えて下さり、最終的には大きな事故もなく実現することが出来た。遠征の試合では現地の同年代（少し年下のことも多かったが）を相手に互角以上の試合を展開した。最高の環境でサッカーをさせて頂き、皆のモチベーションも非常に高かった。試合を行った全てのピッチが良い状態の芝生であり、芝生を生かしたプレイや、組織にとらわれない個を大事にするサッカーを体感することが出来た。日本とは違うサッカー環境を体感することに加え、一流のサッカーを見学できたことも大きな収穫となった。スペインリーグを観戦し、アスレティック・ビルバオの練習を見学した。この見学は、選手を非常に近い位置で見ることが出来たのだが、普段から先生方に指導されていた「止める・蹴る」の上手さ・速さには衝撃を覚えた。基礎の重要性を強く再認識させられた記憶がある。そして、サッカー以外でも非常に充実した時間を過ごした。帰国の際に立ち寄ったパリも含め、あの時に様々な場所を訪れたことは大きな財産となっている。

このスペイン遠征が私達の最大の思い出であることは確かだ。しかし、私が今、ふとした時に思い出すのは、やはりあのグラウンドでの日々のことだ。

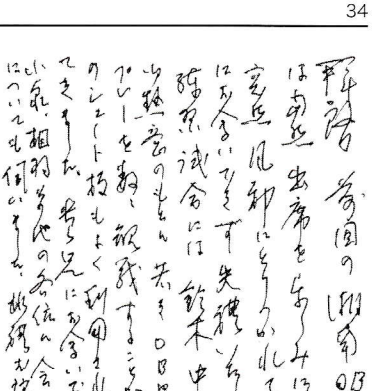
引退試合もあのグラウンドで行われた。1対4の完敗。全てを出し切ったというよりは、チームの歯車が噛み合わないまま終了してしまった印象だった。試合が終わって間もなく、選手権まで残った私

達三年の五人は清水先生に怒鳴られた。負けたことではなく、自分達が今まで練習してきた戦術を貫き通さなかったことを先生は怒っていた。全力を出し切れなかったと感じた私は、泣いた。でも、涙が枯れるほど泣くことも、大声で泣くことも出来なかった。戦術を忘れ浮き足立った自分への悔しさと、力を出し切れなかったわだかまりの様な感情が残った。正直言って、それは今でも消えることはない。引退の時抱く感情は人それぞれだとは思うが、私はこの様な不完全燃焼で終わってしまった。

でも、その不完全燃焼がこの五年間の糧となってきた。私はサッカーを辞め、一年の浪人生活の後大学生となったが、何か困難にぶつかった際には「あんな思いは二度としたくない」と思えば頑張ることが出来る。辛い時頑張らないことより、辛い時逃げることの方が、後で辛い思いをすることは身に沁みて分かっている。引退が決まったにも関わらず、怒鳴り散らしてくれた清水先生の言葉は一生忘れてはならないと思う。そして、あの時持つことの出来なかった自分を貫く強さを養っていきたいと思っている。

素晴らしい環境で、掛替えのない仲間と努力出来たことは本当に幸運なことだった。インサイドキックのボール回転も、グラウンドの熱気も、辛かった走り込みも、忘れられない記憶だ。物事への取り組み方や考え方等、私の基盤はあの時形成されたと言っても過言ではない。私は現在大学四年で、来年の就職が決まっている状況であるが、今後もその基盤を大切にしながら湘南高校サッカー部ＯＢとして誇りを持って日々を過ごしていきたいと思う。

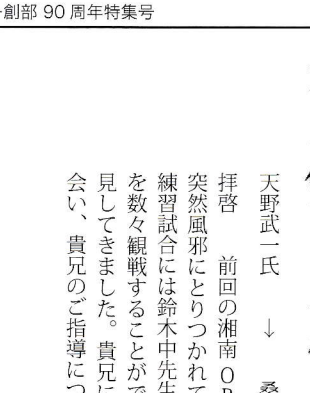
最後になりましたが、先生方やＯＢ会の皆様を始めとする現役時代お世話になりました全ての方に、改めてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。皆様、そして現役チームの益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。



〈本文 15 ページ参照〉

天野武一氏　↓　桑田　孝氏　　平成8年4月29日付

拝啓　前回の湘南ＯＢのお集まりの節は当然出席を楽しみにしておりながら、突然風邪にとりつかれて欠席し、皆様にお会いできず失礼いたしました。本日の練習試合には鈴木中先生の監督のご熱意のもとに若きＯＢや現役の元気なプレーを数々観戦することができ、岩渕記念のシュート板もよく利用されているのを実見してきました。貴兄にお会いできなかったけれども小泉、相羽その他の各位に会い、貴兄のご指導について伺いました。非礼お詫び旁々　敬具



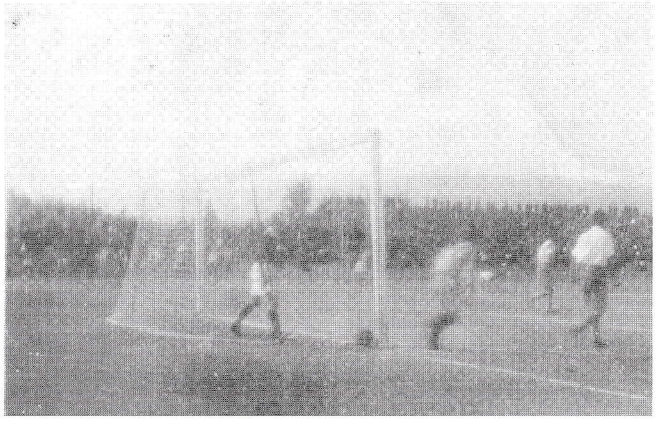
天野武一氏　↓　桑田　孝氏　　平成9年9月30日付

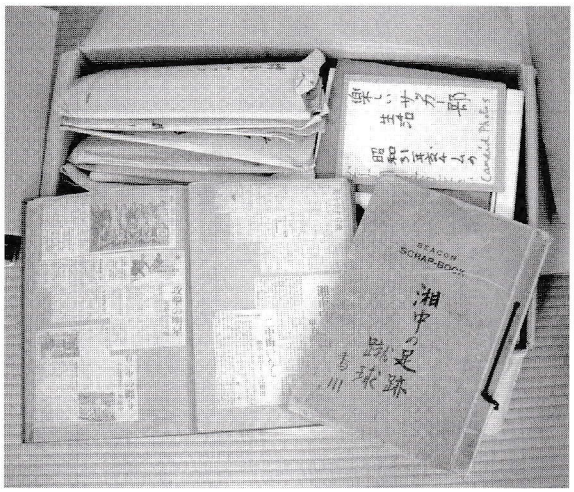
拝啓　時下御清適の御趣を拝し大慶に存じ上げます。降って老生は去る八月初旬頃より健康を害し東京において入院生活を続け、九月六日漸く退院、目下自宅で病後の療養中であり、湘南サッカーＯＢの皆さんにもすっかり非礼を重ねてしまいました。些少乍らＯＢ会に寄付を申し出、振込先を確認している際に急遽入院したため未済になって恐縮です。ついては送金振込み先番号を伺いたく是非お知らせください。　敬具

〈昭和 34 年正月　蹴球祭（湘南グラウンド）〉

〈昭和 21 年 11 月　国体優勝↑↓〉

〈昭和 2 年、2 回生卒業写真〉





〈事務局保管の資料より↑↓〉

〈サッカー・湘南関連出版物〉

湘南サッカーにおける（ペガサスサッカークラブ）の意義

昭27年卒　柳川明信

始まりは旧交を温める懇親の場の思いつき（みんなも中年になったが又サッカーをやろうよ）から、昭和53年11月40歳代前半のサッカー部OB40名余で結成。その後湘南OB以外の人々の参加も求め30年余経た今日、会員130名余年代別（40代～70代）五チームを擁し活発に活動しているクラブに発展しました。

このペガサスの存在意義は会則第三条目的に、サッカーを通じた会員相互の親睦と心身の健康増進と、本会発祥の趣旨に鑑み（神奈川県立湘南高等学校サッカー部）の発展に資する。と明記されているところです。

サッカー部OB会は永らく天野さん（1期）が会長を務められましたが、運営、現役支援指導、会則など即岩渕さん（2期）。それを各年代のOBが支える体制だったと聞いております。OB会チームは戦前より活躍、昭和23年第一回都市対抗で優勝されたほどです。戦後黄金期を経て活動は続きこの力は現役の指導にも発揮されてきて、岩渕さんはOBチームが活性化することが現役支援に繋がると言われておりました。

しかし昭和40年代以降旧制世代のOBは社会人として仕事多忙の年齢、時に活動するも単独チーム編成は困難になり、岩渕さんが再活性化を考えていた丁度そのような時ペガサス結成の話となり、創立趣旨説明に松本（30期）大内（31期）両君が岩渕宅を訪問、大層喜ばれ創立メンバーの人選やOBチーム用に用意していたユニホーム一式の譲渡、後にチーム名命名、ご自身も参加されました。

活躍し実績ある年代の幾つかはOBチームを作り活動しますがOB会としての縦の繋がりにはあまり結びつかない点があります。年に2、3の会合のOB会では活性化しにくく、各年代を繋げるOBチームがあればより多くのOBが集まり現役支援が続けられるにではと岩渕さんと話し合ったことがあります。

ペガサス結成の前後から全国的な中年サッカーの盛り上がりがあり継続の過程で40歳が50代になった時、旧制中学OBチームの活動にも参加次第に五十雀となり、それが六十雀に、今や七十代チームへと発展しました。年代作りの過渡期には混成になりなにかと手間がかかるところを、山本（27期）中原（30期）両君が中心になりOB以外の同好の人にも多く参加を求め人員を確保し、クラブ運営も会長、監督、会計、庶務など個人負担から組織化し本部機構のもと五チーム毎独立組織とし合議運営となりました。

そしてOB会現役員もペガサス主要メンバーでありペガサス活動とOB会運営が表裏一体の組織として、現役支援の核となったと思います。

湘南OBが40歳になったら入会を勧め同世代を増やし50、60と年代を続けていってもらえば永続性を保てるのではないかと考えます。

またプレーをしなくなった会員も（サポート会員）として在籍してもらい、クラブライフ（ペガサス祭り、忘年会、納会）に参加を勧めています。

ペガサス歴代代表　故大内　、井上（36期）牧村（37期）田部井（42期）君、監督、庶務、審判などをつとめ、創立以来続けて来たメンバーと共に、岩渕さんから依頼された現役支援のためのOBチームの組織化と続行は一応果たせたのだはないかと思っています

終わりに

結成初期～中期　メンバーは働き盛りの転勤族、運営には力になれず、メールなどは無く、ファックスも少ない時代。メンバーも減り気味。この間連絡、会計、庶務兼会長を務めてくれた、自社経営の大内夫妻、大学教授の井上夫妻（奥様も庶務のお手伝い）。組織化されるまでの運営の基盤を保ってくれたことに感謝いたします。

親子・兄弟でサッカー部に在籍

編集部

90年の歴史を重ね、親子・兄弟で、湘南サッカー部で活躍した方々がたくさんいます。

とくに、80回卒以降では、5組の親子サッカーマンが誕生しています。親子と3人兄弟以上のみなさんのお名前と簡単な紹介です。（2人兄弟はたくさんおり、今回はのせていません、ご免なさい。）

●親子

●安保　隆文（15回生）、達明（48回生）、和俊（49回生）

隆文氏はOB会組織を立ち上げ、事務局を務められました。

●渋谷繁夫（36回生）、龍一（82回生）

龍一氏は福井民雄総監督（41回）の元、慶応サッカー部で活躍中

●榊原〈旧姓　安部〉和久（46回生）、和洋（85回生）

●貴志直文（50回生）、大樹（76回生）
●藤塚久雄（54回生）、雄大（81回生）
久雄氏は、元サッカー部監督。現茅ヶ崎北陵高校監督。
●篠塚猛（54回生）、貴志（82回生）
猛氏は元Jリーグ事業部長。貴志氏は現コーチ。
●久保徹（55回生）、大輔（82回生）
●川添真一郎（55回生）、眞之介（85回生）
●3兄弟以上
●天野武一（1回生）、俊三（2回生）、豊雄（5回生・新姓は松村）
武一氏は、初代のOB会長。
●小野　勝（17回生）嘩（17回生）……双子のご兄弟
●海老原謙（17回生）、純（18回生）、朗（22回生）、俊（27回生）
4人兄弟で在籍
●香川　嵩（22回生）、稔（25回生）、彰男（38回生）
元校長の香川幹一さんの息子さん。
●早川純生（18回生）、次郎（20回）、忠生（23回生、現姓小林）
純生氏は元神奈川県サッカー協会理事長、小林忠生氏は日本代表
●小泉親昂（39回生）、親種（41回生）、治子（44回生）
治子さんは初代の女子マネージャー。
●水上雅樹（56回生）、茂雄（61回生）、禎三（65回生）
●松岡　三四郎（卒業回不明）、五六（9回生）、七郎（卒業回不明）、甥の巌（22回生）
御兄弟3人と甥の巌氏が在籍しています。

現監督　小林周太郎

湘南高校サッカー部、創部90周年おめでとうございます。日頃より、OBの皆様からの心強いお力添えと温かい励ましに感謝いたしております。また、長い歴史の中で築き上げた実績の数々は現役選手の誇りであり財産であります。

さて、90年の中で1年とちょっとしか携わっていない私が何か書くこと自体お恥ずかしい限りですが、私が外から見ていた（勝手に想像していた）湘南高校と中から見た湘南高校サッカー部を書くことにしました。失礼な表現もあるかもしれませんがご容赦下さい。

『湘南高校』・・・私の中学・高校時のイメージ、①オール5でも入れない神奈川の頂点の学校。②自分に入る学力などないので興味はなかったが、誰でも名前は知っている。です。大学時も湘南出身者と交流するような機会のある生活を送るはずはなく、教員となり厚木北高校へ。というわけで、この時点でもイメージは変わらず・・。ただ、1つだけ追加される。③サッカーをするために集まったチームが絶対に負けてはいけない（負けたくない）学校・・・勝てるものが見あたらなくなってしまうため・・・。湘南高校を筆頭に頭のいい子達の集中力が技術・体力の差を消してしまい、緊迫した接戦にもつれこまされるゲーム（これも勝手に思っていますが、こういうチームって堅守速攻が得意、守備はボールがないところでほぼ決まるので、技術がなくても練習から頭を使っていて、戦略・戦術がしっかりしたらなんとかなったりします。カウンターは練習しなくても誰でもできます。）を何度も目の当たりにさせられていたので「偉大なる偏差値攻撃」と勝手に名付け、おそれるとともに対戦のないことを願っていました。運のいいことに10年で対戦は選手権予選の1度だけですみましたが。

さて、そんな私が湘南高校にくることになり、心配した（された）ことは、頭のいい子をサッカー馬鹿にしてしまわないかということでした。が、今のところは大丈夫みたいです。サッカーに前向きに、ひたむきに取り組みながら学業もおろそかにしない選手が大勢いることが心強く、『偉大なる偏差値攻撃プラスα』のサッカーで再び神奈川の代表として全国大会で上位進出することを目標にしています。

90周年を迎えたということで、次は・・・私は91周年が大切。1年1年、勝負していきます。そうしているうちに、校庭に人工芝のグランドができたりするのですかね？

失礼な文章となってしまいましたが、これからの支援もよろしくお願いいたします。あわせて、ぜひグランドに足を運んでいただき、応援をいただけたらと思います。

平成年間の記録　その 2　H14 ― H21

年　度	監督 / 主将	大　会		試合結果	備　考
2002	清水好郎	関東	1 回戦	湘南 0 ― 1 東海大相模	
H14	岩田好一	総体	3 回戦	湘南 0 ― 1 保土ヶ谷	
		選手権	2 回戦	湘南 5 ― 6 横浜南	
78 回卒	牛山旬平	新人戦		湘南 0 ― 1 茅ヶ崎	中央大会
2003	清水好郎	関東	4 回戦	湘南 0 ― 1v 光明相模原	ベスト 16
H15	岩田好一	総体	6 回戦	湘南 1 ― 2v 日大藤沢	ベスト 16
		選手権	3 回戦	湘南 0 ― 2 慶應	
79 回卒	櫻井洋祐	新人戦	2 回戦	湘南 0 ― 2 金井	中央大会
		※ 2003 年春、スペイン遠征中止（イラク情勢の悪化により）			
2004	清水好郎	関東	1 回戦	湘南 0 ― 3 茅ヶ崎北綾	
H16		総体	5 回戦	湘南 0 ― 1 小田原	
		選手権	4 回戦	湘南 1 ― 4 武相	
80 回卒	浅野雅人	新人戦	地区予選負		
		U17	2 部 A ブロック	2 勝 3 敗 2 分（5 位）	
		※ 2004 年春、第 1 回スペイン遠征			
2005	清水好郎	関東		不出場	
H17		総体	2 回戦	湘南 0 ― 3 秦野南ヶ丘	
		選手権	4 回戦	湘南 0 ― 3 厚木北	
81 回卒	田村　仁	新人戦	3 回戦	湘南 0 ― 3 法政二高	中央大会
		U17	2 部 B ブロック	5 勝 1 敗 1 分（1 位、入替戦負）	
2006	清水好郎	関東	5 回戦	湘南 1 ― 2 秦野	ベスト 8
H18		総体	5 回戦	湘南 2 ― 4 日大藤沢	ベスト 32
		選手権	2 回戦	湘南 0 ― 3 横浜翠嵐	
82 回卒	渋谷龍一	新人戦	3 回戦	湘南 0 ― 3 旭	中央大会
		U17	2 部 B ブロック	3 勝 1 敗 3 分（4 位）	
		※ 2006 年春、第 2 回スペイン遠征（相羽、鈴木、黒沢医師）			
2007	清水好郎	関東	1 回戦	湘南 0 ― 0 隼人	
H19		総体	4 回戦	湘南 0 ― 3 淵野辺	
		選手権	3 回戦	湘南 1 ― 2 藤沢西	
83 回卒	小松昌平	新人戦	1 回戦	湘南 0 ― 1 湘南学院	中央大会
		U17	2 部 D ブロック	4 勝 1 敗 2 分（2 位）	
2008	小林周太郎	関東	2 回戦	湘南 0 ― 2 藤沢西	
H20	曽根　梓	総体	3 回戦	湘南 1 ― 2 武相	
		選手権	2 次 2 回戦	湘南 0 ― 1 横須賀	ベスト 32
84 回卒	榛葉達彦	新人戦	2 回戦	湘南 1 ― 2 横浜創英	中央大会
		U17	2 部 C ブロック	4 勝 3 敗（4 位）	
		※ 2008 年春、第 3 回スペイン遠征（加納、関）			
2009	小林周太郎	関東	3 回戦	湘南 1 ― 2 座間	
H21	曽根　梓	総体	2 次 1 回戦	湘南 1 ― 2 湘南工科	ベスト 27
	大東洋樹	選手権	2 次 1 回戦	湘南 0 ― 2 日大藤沢	ベスト 32
85 回卒	土谷太皓	新人戦			中央大会
		U18	K2　A ブロック	5 勝 2 敗	

編集後記

平48年卒　関　佳史

湘南高校は1921年に創立。サッカー部の創設90周年は2011年4月ですが、2010年4月から3月の間に90周年記念事業を行うことを決定しました。この会報記念版は、2010年4月1日付の発行となります。若干前倒しではありますが、2010年1月10日の蹴球祭の日に間に合わせて制作し、記念のパーティーもこの日に実施する運びになりました。

過去、1981年「湘南サッカー半世紀を経て　～岩渕二郎追悼記念」、1989年「湘南サッカー実戦譜　特集鈴木中先生の28年間」、2001年「80周年」会報スペシャル版と3度の記念誌、記念会報を作成しています。今後、記録の散逸を防ぐ意味でも、10年に1度のスペシャル版作成を目標にしたいと思います。

今回の記念誌は、OB会幹事の9名に加え、特別に22回桑田孝さん、27回柳川明信さんのご協力をいただきおよそ10ケ月で作業を行いました。お忙しい中、原稿を書いていただいた皆様ありがとうございました。また、27回の山本修さん、41回の植松二郎さんはじめ多くの皆さまから貴重なアドバイスをいただきました。重ねて、感謝の意を表します。編集委員を紹介します。

会長・井上孝（36回）、副会長・牧村英樹（37回）、小泉親昂（39回）、相羽克治（41回）、事務局長・横山雅行（45回）、事務局・浅倉泰（45回）、関佳史（48回）、武藤俊一（53回）、須藤和重（63回）敬称略

また、過去の記念誌のテキスト化とHPへの掲載作業を少しずつですが進めています。こちらは、45回浅倉さんを中心に、48回中嶋修さんの協力を得て進行中です。

さて、記念パーティーは、学校の外でやることになりました。前回の80周年は清明会館の学生食堂をお借りしました。その後、校内での飲酒は一切できなくなり、外部でやらざるを得ない状況になっています。世の中の流れではありますが、寂しいものです。

最後になりますが、会費納入についての御礼です。今年は90周年の節目ということもあり、HPでの現役の情報伝達、関からのメールでのお知らせ、試合リポートなどを強化しました。この結果、例年の10％を上回る納入がありました。800名の会員のうち、およそ130名の皆様が毎年払込を行っています。この率が10％改善すると、OB会の会計は大きく好転します。本当にありがとうございました。しかし、現状では会費納入が40歳以上に偏っています。100周年にむけて、若いOB会員が参加できるOB会づくりが今後の課題と考えています。

＊今回の90周年特集号は、今まで刊行した冊子・会報を参考に、100周年に向けての新しい資料として等々、執筆者への依頼も含め委員会で検討し、編集させていただきました。いたらぬ点はお許しください。

なお、通常の会報は、毎年12月に発行予定ですので、ご意見や各種情報を自薦・他薦含め10月中にご連絡頂ければ、その年に掲載可能です。より充実した、会員各位に喜んでいただける会報作りにご協力をお願い申し上げます。

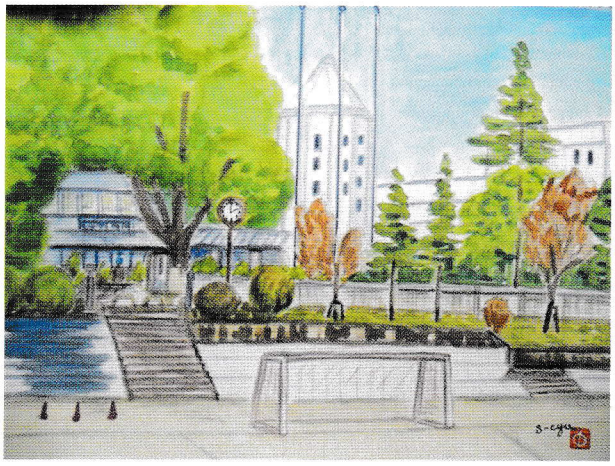
湘南 湘南サッカー部 90th Anniversary 南

湘南高校サッカー部々歌

岩渕二郎 作詞
鏑木欽作 作曲

一、白雲と高く天翔る理想
青春を培う男児ぞ我等
伝統煌たり響けりその歌
行け行け今ぞ青き征衣
相武の健児は天下に覇たらむ
湘南！湘南！

二、若き日を勁く漲る力
烈日に鍛う牡獅子ぞ我等
清明燦たり光れりその旗
立て立て今ぞ無縫の天衣
輝く王座を断じて獲らむ
湘南！湘南！

湘南サッカー部OB会報(90周年特集号)

発行　湘南サッカー部OB会
平成22年4月1日